

NHK学園生涯学習フェスティバル

鎌倉市俳句大会

令和元年五月十七日（金）午後一時～四時

鎌倉芸術館 小ホール（神奈川県鎌倉市）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長

砂押 宏行

二、選者紹介

一、鼎談「俳句の力」

宇多喜代子

星野 高士

星野 椿

― 休憩 ―

第二部

一、表彰

一、選評

NHK学園俳句講座アドバイザー・「草樹」

宇多喜代子

NHK学園講師・「鷹」

高柳 克弘

「玉藻」

星野 高士

NHK学園俳句倶楽部選者・「玉藻」

星野 椿

「蒼海」

堀本 裕樹

（五十音順）

一、当日句「鎌倉の夏を詠む」入選発表

高柳 克弘

堀本 裕樹

北林きく子

総合司会 フリーキャスター

い あ い さ つ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 鎌倉市俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「山」あわせて六百二十二句にのほりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十八年間に、五十五万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様、ご協力をいただいた神奈川県・鎌倉市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年五月十七日

鼎談・選者



宇多喜代子（うだ きよこ）「草樹」そうじゆ会員代表 NHK学園俳句講座アドバイザー
昭和十年山口県生れ。「獅林」を経て「草苑」（桂信子主宰）創刊とともに入会。桂信子没後に創刊した「草樹」の会員としてその精神を継承。第三十五回蛇笏賞、第二十七回詩歌文学館賞、第十四回現代俳句大賞受賞。
読売新聞俳壇選者。「NHK俳句」選者。句集『夏月集』『象』『記憶』『宇多喜代子俳句集成』『森へ』など。

月刊のとどく律儀や松の芯



星野 高士（ほしの たかし）「玉藻」たまも主宰
昭和二十七年神奈川県生れ。祖母星野立子に師事し、十代より作句。「ホトトギス」同人。鎌倉虚子立子記念館館長、日本伝統俳句協会会員、日本文藝家協会会員、国際俳句交流協会理事、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会理事。句集『破魔矢』『谷戸』『無尽蔵』『顔』『残響』、著書『星野立子』『俳句創作百科 美・色・香』『俳句真髓』、共著『立子俳句365日』など。

籐椅子に深く座れば見ゆるもの



星野 椿（ほしの つばき）「玉藻」たまも名誉主宰 NHK学園俳句倶楽部選者
昭和五年東京都生れ。父・星野吉人、母・星野立子、祖父は高浜虚子。昭和五十七年、母立子逝去とともに、俳誌「玉藻」主宰を継承。日本文藝家協会会員。鎌倉虚子立子記念館代表。句集『早椿』『華』『波頭』『マーガレット』『椿四季集』、著書『これから始める俳句入門』。

頼朝の頃よりありし花の馬場

選者



高柳 克弘（たかやなぎ かつひろ）「鷹」編集長 NHK学園講師
昭和五十五年静岡県生れ。藤田湘子に師事。第十九回俳句研究賞受賞。句集『未踏』（第一回田中裕明賞）、『寒林』、評論集『凜然たる青春』（第二十二回俳人協会評論新人賞）、『どろがほんど？万太郎俳句の虚と実』、鑑賞書『芭蕉の一句』、『名句徹底鑑賞ドリル』。読売新聞夕刊「KODOMO俳句」選者。

蟻強しこゑもことばも持たぬゆゑ



堀本 裕樹（ほりもと ゆうき）「蒼海」主宰
昭和四十九年和歌山県生れ。第二回北斗賞、第三十六回俳人協会新人賞、第十一回日本詩歌句随筆評論大賞受賞。俳人協会幹事。著書に句集『熊野曼陀羅』、又吉直樹との共著『芸人と俳人』、『俳句の図書室』、最新刊に穂村弘との共著『短歌と俳句の五十番勝負』。

火蛾落ちて夜の濁音となりけり

全作品を名前を伏せて、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定しました。

NHK学園鎌倉市俳句大会大賞

春宵や鎌倉彫の盆の影
神奈川県 野口 聖

枝打ちの次の餅をきき澄ます
神奈川県 須佐 はじむ

△題詠「山」▽

壺焼を待てば夕富士海の上
神奈川県 諸星 泰子

鎌倉市長賞

谷戸もまたもののふの道山桜

東京都

高橋 きよ子

NHK横浜放送局長賞

母の日や山の奥まで宅急便

鹿児島県

白男川 孝仁

鎌倉虚子立子記念館賞

雲水の袈裟に一ひら夕桜

東京都

坂野 たみ

宇多喜代子 選

特選

枝打ちの次の銚をきき澄ます 神奈川 須佐 はじむ

杉や檜をいい材木にするために、順次下枝あたりから切り落とす。そのたびに鉋や鋸の発する音が静かな山中の樹々の間をぬけて笏となり山の空気をゆする。次の音、次の音をききながら、更に次の音を待つ。枝打ちをしている人の姿は見えない。音のみが聞こえる。

草木に雨水の雨のひとしきり 茨城 北浦 敏子

二十四節気の一つ「雨水」は新暦の二月二十九日頃にあたる。この頃から雪や氷が雨に変わる。この雨水の日に雨が降った。冬の間身を縮めていた樹木や草がこの春のはじめの雨を受け、さいきとしはじめる。ひとしきり降った雨が大地にしみこみ、草木の根をうるおす。

……題詠「山」……

裏山へ耳の傾く初音かな 宮城 吉田 博子

家の裏の山から今年はじめての鶯の鳴き声を耳にした。初音ははじめて鳴く鶯か杜鵑の声のこと。この句からは鶯の声だろうと想像する。この裏山には、毎年この時季に鶯が来るのだろう。何か用をしながら耳だけを裏山に預けている。親しみを感させる裏山である。

秀作

寒月の一樹一草艶めける	東京 佐藤 孝志
春の雨文法いつも眠くなる	石川 中川すなを
金平糖白磁の皿に春立てり	石川 渕野 栄子
手のひらの雛に声をかけにけり	千葉 荒井ハルエ
一尺の水の深さに芹を摘む	兵庫 名越 順子
山茶花の打ち合うごとく散りにけり	石川 飯田 順子
敗戦日だまりこくつて草を抜く	静岡 田中哲山人
独楽を打つ真一文字の白き紐	三重 伊藤はじめ
もののふの押し寄せている木下闇	神奈川 五十嵐 守
いぬふぐり小さき風が吹いてゆく	東京 久保登志子
春兆す金平糖に角いくつ	東京 淵上 淳乎
亀鳴くや橋の真中の県境	茨城 今井多津子
あんぱんもクリームぱんも買ふ子規忌	東京 目黒 輝美
小さめに立子の句碑や白牡丹	大阪 小林 英樹
山の日は山にかへりて春夕焼	東京 河田 公枝
鎌倉に昔ありけり春の月	神奈川 石関 武之
半眼の虎の欠伸や小六月	千葉 鎌田 道子
空円く地は水平に年明ける	埼玉 入澤 愜子
大仏のまるき背濡らす花の雨	愛知 河合 澄江
米粒の芯まで甘し今年米	静岡 佐野 月子

……題詠「山」……

築打たれ山河定まる秩父かな	東京 朝田 黒冬
初富士も北斎富士も薄墨に	栃木 阿部多恵子
山が動き山が近づき春隣	山形 佐藤 豊光
名を呼ばれ大きな返事春の山	山口 益田満寿美
噂の中に鎌倉五山あり	群馬 木下 涼薫

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

永き日や施設の倚子に正座して	四十物敦子	昨日見て今日見て坂の寒椿	伊藤恵美子	早春の庭に少しの色と風	大川 宣子
おうおうと風を遊ばす蓮の池	四十物文代	春霞濃尾平野は浅葱色	伊藤 恵水	底紅の底に昨夜の雨のつぶ	大河原倫子
靴紐のゆるき結び目春隣	青木喜代江	長谷仏の涼しき様を拝顔す	伊藤 津良	紅梅の散り込む古寺の心字池	大久保文夫
笛失せしままの身構え享保雛	青麻 恵子	建長寺春を登りて瑞泉寺	伊藤 正博	そろわねど七草粥や今朝の膳	大島 糸子
ものの芽や馬の匂ひの風動く	赤尾 和子	はれやかな空の色なり夏に入る	井上 敏子	右に富士前は真面目な夏の海	太田 邦子
百年の齢の重みや鏡餅	浅井 豊子	駕籠にのる幼のまなこ夏祭	井上 義昭	春眠し布袋の腹の力こぶ	大沼 卓郎
今まさに夏の光が鎌倉に	朝島 栄實	平成の最後の桜母とゐて	井原 文江	虚子囲み野遊びのごとく句碑悠悠	大矢知順子
麦畑ゴッホの太陽渦なせる	阿部多恵子	水涸るる幾何学模様池の底	今井 善衛	力石もたげることく霜柱	岡田 邦男
うきうきと何も買はずに苗木市	あまの樹懶	松原に飛べぬにはとり春寒し	今井 眞弓	目高の水替えて青空戻りけり	岡野未由子
古戦場風が見つつけし黄水仙	網野 香琳	門前の屋台仕舞や寒鴉	岩上 利一	締めくくるやうに降る雨二月尽	岡野 安代
雪解けや歎をひたして寺の池	有田 芳美	新時代来る立春の波の音	岩崎 絵美	天高く飛行機雲の西へ伸び	岡村 峰子
大寒やバケツに捉ふ月一つ	有馬 紫秋	一筆に心寄せ読む賀状かな	岩崎 幸邦	それからのことも話して秋真昼	岡本 恵
多摩川にかすかな音や春浅し	飯沼三和子	店頭のと菓子鮮やか水温む	岩間 務	薪能思はぬ冷えをまとひけり	小川美津子
玉砂利の清きを踏みて初詣	井川 登子	雲水の 一列にゆく春時雨	岩本 弘	古草の乱れゐて白蠟の色	萩原美保子
大夕焼鎌倉五山一色に	池田 功	色淡き口紅を買ふ年の暮	上ノ山陽子	不器用にひたすら生きていぬふぐり	奥住 士朗
一病と生きる歩幅や凍ゆるむ	石井 俊子	まず記す息子の来る日初暦	牛久保悦子	眠る児を夢ごと移す夏座布団	奥村 利夫
住職の座したるところ冴返る	石井 洽星	地続きの神社仏閣春一番	内田ゆり子	あれこれと用思ひ出す炬燵かな	奥村 芳弘
島になほ島守る一戸野水仙	石塚 信子	せせらぎの光あつめて落の臺	梅本登志子	肘を上げ篠笛構へ義経忌	尾崎眞里子
水垢離の桶庭に据え寒の寺	市川 東子	くきくきと骨を鳴らして春田打つ	榎 正好	畑打つや一声高く鳶の笛	垣内 重行
力ある羽ばたき揃ひ鳥渡る	井出くみこ	熟練の手が次々と柿を剝く	遠藤 操	鶏卵の早春の日の匂いかな	柿谷 有史
春蟬やかかけ込み寺の門狭く	井手 浩堂	薪能はじめは小さき鼓の音	大川 千草	静脈の浮く手の甲や昭和の日	勝山 恵子

学ぶ子に氷柱をぬけてくる光	金子加津久	早春やぬかるむ牧の蹄跡	栗山 純臣	名にし負ふ大樹の跡や実朝忌	佐藤 勝
寒見舞夫義母の喪の知らせかな	鹿野 律子	紙の籬壁にもたれて立ち給ふ	来栖多賀子	春風をまとひて確か原節子	佐藤 美保
鎌倉に十井のあり雪解風	菊地 水醉	真青なる亥年の空へ冬木の芽	小堺 政彦	ウクレレの円き調べや合歓の花	佐藤 亮子
親友が走つて来るよ夏木立	河合 昭子	二つ三つ落ちて椿の庭らしく	小柴 智子	卓上に白磁の皿や燕来る	佐野 明美
艶やかに能面光る無月かな	川崎 和啓	花散るや潮騒日々新たななる	児玉 君子	相模湾うねり眩しき麦の秋	塩川 隆三
立春に叶ふ日和となりにけり	河田 公枝	春潮の光放ちて寄せ来たり	児玉 胡餅	この道に残る靴跡すべて春	品川 利枝
止まる枝決まらぬままに寒雀	神吉 春美	歌留多取る一つ覚えし恋の歌	小西 貴子	霧襖破りて下る男坂	篠 信子
蛇急ぐ室の八嶋の水煙り	菅野 孝子	人力車鎌倉宮に風薫る	小林 一義	春惜しむ草食獣のやさしき目	島田 幸子
東京の音無き夜半や春の雪	神戸恵美子	花吹雪回転木馬走りだす	小林 生子	山形を三つ描いて春の鳥	清水 洋
たんぼぼの絮の冒險始まりぬ	岸下 庄二	昭和の日新聞で折る兜など	小林たけし	鳥の声枝に潤う雨水かな	清水 洋
耕しの轍の跡や水光る	木嶋 政治	柿若葉ながめ天神橋渡る	小林 敏和	緋袴の裾少し上げ春時雨	清水ゆみ子
菰櫛の百が壁なす初社	岸本眞智子	剪定の葡萄の樹液光る朝	小松 和美	江ノ電に射し入る朝日若葉風	下和田眞知子
バスのドア開く度わつと蟬の声	北橋 晃子	四島も樺太も越え鳥帰る	小屋 幸保	曙の放つ金色の寒雀	新谷 清一
新年会老いどち唄ふ浜甚句	喜多村純子	アルバムに至福のころの花の下	小山恵津子	郭公の罨が撥ねる廃校舎	進藤 鳥人
観覧車は地球の円心春の海	北村 文江	鎌倉の波の正調春の鳶	近藤 英明	秋澄むや分水嶺に出で立ちぬ	新谷 辰雄
三角の波におもちやのやうな鴨	木下 涼薫	遣されし峡のほまち田耕せり	今野 吉見	鎌倉に苧環の花咲く日なり	鱈 鉦志
路地裏の昭和突き出すところてん	桐畑 佳永	残雪の片裾長し富士の山	斎藤 恵葉	生きている証障子を明け放つ	鈴木 砂紅
一粒の地に生ふいのち麦青む	桐山 甫	木蓮や天突く旋律の如し	村上瑠璃甫	鎌倉の生々しき門の鳥総松	鈴木三光子
駅毎に江ノ電花の風を乗せ	楠 暢太	真ん丸の薄氷丸く解けてゆく	坂口 智弘	巫女のさす白番傘や花の雨	鈴木智香子
川岸に雪解の水を測りけり	工藤 昭和	霊峰の水を豊かに冬の滝	崎田 宇城	うぐひすや大炬たつぷり湯のたぎり	鈴木美恵子
一冊は貸し出し中やひばり東風	蔵 堯子	立春の卓にこぼれし粉葉	佐々木勝子	左手で字を書くやうな棚霞	鈴木 周子
名刹の薨をおほふ山若葉	倉本 馨	鎌倉の海山あをく初鰹	佐藤 信子	一病や子の情知る冬の朝	鈴木 よし
あたたかやりぼん結びのできぬひと	栗林さと子	筆圧も撥ねも変らぬ賀状かな	佐藤 正博	春泥に歩幅大きくなりにけり	住田 征夫

雪解急棚田溜池水の量 閑 忠男	さりげなく席譲りたる赤い羽根 寅屋 照夫	時つげる障子明りの白さかな 蓮見うた子
街灯の轍に澄めり薄氷 閑 雅己	啓蟄や尼寺に干さるるスニーカー 頓所 友枝	サーファーの真つ逆さまや夏前海 波多野富代子
おみくじの固き結び目初御空 芹澤 弘美	墨痕や一筆書きの年賀状 中澤 泰三	鳥帰る地には前方後円墳 浜田はるみ
夢の中までも八月十五日 曾根新五郎	鬼灯を鳴らし遠くを見る母 永須 武司	いろいろな鳥が来ている梅の花 林 和子
心音に重なる木魚冴返る 高嶋かさね	うららかや恐竜の名をみな覚え 中筋のぶ子	手をつなぎはなさぬ子ゐて冬温し 早瀬 裕昭
掬ふ手に軽しと思ふ春の水 高田みづ紀	やはらかき湖北の朝日齋粥 中野 達也	強東風や一の鳥居を吹き抜けて 原 扇泉
春あらし青年の樹折られけり 高田 睦子	一輪の一輪だけの椿落つ 中畑 耕一	若楓青きしづくの身をつたふ 原 雅
亀の鳴く建長寺より下り坂 高橋 央尚	老梅の白に拍手をおくりけり 仲村 輝夫	仰ぎゐる空の深さよ落椿 張替 和子
遅しき老婆が一人麦の秋 高橋みつる	鷺草や五風十雨の軸ひとつ 中山 壹路	北風やふつと煮物の匂ひせり 馬場 弘子
奥能登の風にたんぽぽ低く咲き 高山一三	ひそやかに芽の出る気配雨水かな 鍋屋 立子	立春やふんわり乗せる蒸しタオル 樋口亜茶子
鳥帰る空に大きな道標 武井 猛	球場にドカンとひとつ雪だるま 名雪 國男	冬至梅とんぼ帰りの墓参かな 肱元 燈穂
異国への花の便りをまつ先に 竹内はるか	晩学は湧水のごと春の水 名和 永山	たんぽぽや縄の電車の通り道 毘舍利愛子
冬日向牧の黒牛寄り合へる 田中 ゆず	今少しここに居りたし花の雨 南里 要	吊るし柿病臥の軒に今年また 平地 俊雄
敬老日園児の瞳輝きて 田中リッ子	神の鯉鱸よく動く小春かな 西久保キクノ	如月の強弱ありし光かな 平野 孝純
鳥帰る眼光炯々北に向け 種井 保博	奥さんが元気でいいね春隣 西島 通人	木の芽晴れ鳶一円を描きけり 鱒崎 洋一
春立つ日空の色から始まりぬ 田村久美子	国後のありありみゆる寒日和 西塚 好幸	階や盆地 一色 桃の花 深沢 愛子
流鏑馬の一矢を放つ土埃 千葉アツ子	江ノ電の吊革揺らり春の海 西村 久子	ふくろうが潜んでいそう書架の奥 深谷 泰子
何事もなき日二人の蜷汁 津田 京子	鎌倉の奥うつくしき枝垂梅 西山 敦	長男の来る日長女も来てうらら 福島テツ子
真間の井の涼しき音や多宝塔 露木 伸作	雪解水編目の荒き蔓橋 能田 孝昌	揃ひたる袖袂より盆踊 福島 政勝
屋久杉の万古の森や苔の花 土居 直子	春宵や鎌倉彫の盆の影 野口 聖	紅葉して山せり出して来りけり 藤枝 信雄
ひとしきり雪解雫の駅舎かな 富樫 桂子	直角の街直線の風冴返る 乗松トシ子	復興の重機の休むこどもの日 船越 光政
春空を叩きジーンズ干しにけり 戸田 絢子	流鏑馬の射手のまなじり新樹光 萩原 成亮	立春やコンパスくると丸を描く 星野いずみ
法話はや佳境に入りし余寒かな 友田 美美	群青の空より花の舞ひにけり 橋本 房子	校庭に蝌蚪の水音生まれけり 堀口みゆき

賑やかに人来て去りぬ冬牡丹	本堂 良衣	唐突に剝きだしの腕猫の恋	矢口 椋子	山の蝶停まりて親し旅靴	磯貝世里遠
人数の中の孤独や葱坊主	前 和子	一皿をころがる海栗の水しぶき	八島 敏	眼の青くなるまで夏の山仰ぐ	伊藤 柳香
口口に立子を語る雛の宴	桥野 雅憲	傷癒えて二月礼者となりにけり	屋代 義男	佳きことの叶いて四度仰ぐ富士	伊藤 文代
風紋の襲目くつきり星月夜	町田 定夫	立春や土に影ある命ある	柳澤 友香	三州や山遠ざかる冬日和	伊藤 満
膝の猫大欠伸して春立ちぬ	松岡 孝子	湯豆腐のたゆたゆとして沈みけり	山岸 宙旅	少しづつ膨らんでゐる春の山	大久保文夫
初詣人の温みをもらいけり	圓山二幸子	もののふの声混じるかに青嵐	山口 楓子	山の音やがて野の音春の来る	岡野未由子
初夏の四方の風受く半僧坊	右山 和子	大仏の裏も表も春休み	山田 蹴人	冬晴れや山に映りし山の影	小木 厚代
うぐひすや竹の門真青なり	溝渕 淑	鳴き竜を鳴かせ白梅こぼしけり	山田 敏子	灯を入れて大きくなりぬ山車囃子	奥村 利夫
天領の山の峰々春霞	南 時子	身震ひをひとつ四月の森に入る	山之内喜七	鎌倉の山鎌倉の星祭	小濃 勉
深雪晴天地人みなやすらげり	美濃部絃三	春耕の土と語らふ齢かな	横山 基詞	山しずか雪解け水の滴りて	片山 輝峰
千年の樹海の息吹若葉風	味村 京子	対岸は安房の国なり懸け大根	吉井ほず江	鉄塔を高く光らせ山眠る	川名せつ子
雨蛙雨の末裔かもしれぬ	宮澤 和子	花八つ手老妻の曳く杖の音	吉岡 亀一	一山を一寺が統べて花浄土	川村 幸子
海の風山の風ありしらす干	三輪 照子	嗜みは鉛筆一本西行忌	吉武 千束	あめんぼう水面の山を飛び越しぬ	岸下 庄二
左見右見小町通りの春日傘	武藤 三山	下町にくねくねの路地春の雨	吉仲 静	山々をつなぐ吊橋風光る	北浦 敏子
白梅忌としたき父の忌梅香る	村井みさを	登拝の神の風吹く冬木立	芳林 淳子	山の奥そのまた奥の月水る	國武 浩之
その奥のどこへ続くか木下閣	村上 美恵	何もかも許せそうなり春の海	米重 初枝	万緑や山より海へつづく径	黒木 淳子
凍滝の裏の磨崖へ水の音	村田 浩	下萌や動かぬままの力石	米田 陽子	首塚の後ろの山も笑ふかな	小嶋 恵美
臘梅や窯元までの登り坂	村橋 克雄	地球儀をぐるりと回す春夜かな	若林 和	山原の空に一点揚雲雀	米須 盛祐
卓上にいつくしみるる露の臺	室 千寿子	善光寺平を走る片時雨	和田 郁江	我を入れふんはり浮くや春の山	齋藤 伸光
大仏の衣にうすき春の雪	持田 市朗	厨なる神に一献春の水	安原 千恵	鎌倉の山滴れば海うごく	崎上 守
早馬の影さながらに青嵐	百田登起枝	……………題詠「山」……………		長停車車掌見ている山若葉	櫻井 良一
江ノ電は揺籃のごと春日和	森 孝枝	山桜夫と義足を休ませり	阿久津勝利	二歩で追う父の足跡斑雪山	佐藤 廣枝
海開き源平合戦ありし浜	森 道隆	山峡に音たててゐる春の水	石井 俊子	鉾脈の尽きたる山の眠りかな	佐藤 勝

里山の火の色変る野焼きかな	志手 睦男	山笑ふ猫犬笑ひ我も又	土居 敏一	老鶯の声止み山は風ばかり	百田登起枝
目も耳も鼻もさどくし落葉山	菅野トモ子	一山の静けさに来て実朝忌	常磐 恵一	裏山に大きな嚏春を待つ	森 祐司
大太鼓ドンと一発山を焼く	鈴木 武	早春の赤城の山の機嫌かな	長岡 和恵	遙かより雪の大山拜しけり	森 要子
鎌倉の山より海へ春立てり	鈴木智香子	けものみちをのぞいてみよう山の秋	中川 雄作	男らの祇園山笠梶を切る	矢島 心月
ものふの越えたる坂や夏の蝶	鈴木美智子	山笑うひらがなのようハイキング	永田タエ子	針山をそのまま持ちて針供養	柳内 恵子
足跡の奥へ奥へと芽吹山	関 さくら	山を見て空見て歩く春野かな	名和 永山	薄氷を割る手水鉢高野山	山原いっこう
山の端を転がりてくる春の雷	瀬古 祥子	刻々と山膨らみて打つ田かな	難波美枝子	遠山の電力風車秋澄めり	吉岡 亀一
赤富士やゴッホの色を炙り出す	宗野 光政	鎌倉や海と山とに夏来たる	南里 要	祖母山の明けそめゆけり稲架襖	吉岡 亨
糠雨の一山覆ふ二月かな	高倉 早苗	人影の動きて連山目覚めけり	西島 晴治	秋気満つ駿河の富士の姿かな	渡邊 潤勝
暮れゆきて山懐の稲架襖	高田みづ紀	山の子は山見て育つ雲の峰	西本 文子	里山で浮足立つよ蕨狩	渡邊 俊響
一川のひびきに開く山桜	高野 知作	しろがねの鳥海山や春の朝	二藤 誠祥		
梅林の一山つつむ香りかな	高橋 睦子	元旦や山の如くに夫の椅子	春吉 智子		
深海となりたる列車青葉山	高原 晴子	耕すや白き山襷遠伊吹	樋口満智子		
夕映の裏山となる赤とんぼ	高松 秀夫	山積みの冬至南瓜や糶合へる	肱元 燈穂		
一山は花のねむりの西行忌	田上 喜和	眠る山背にして母は働けり	風街ゆう子		
一人来て又友連れて山桜	高村 令子	ふくろふの全山微動だにもせず	福島 政勝		
休みなく廻る風車や雪の山	高山一二三	里山の草の実纏ひ付け歩く	福田富美子		
楽しみは下山に多し春霞	竹下 和宏	口中に広ごる山野ふきの臺	房前和加子		
山笑ふ守り袋の良く売れて	館野 澄子	故郷の土石の山や春の月	船越 光政		
空を見て山見て川は雪解水	田中 俊	叡山の句碑の遠きや落椿	保永美代子		
白山の水とうとうと青田かな	田村 峯子	山笑ふ遊具のどれも順番待ち	保理江順子		
山越えし父の寢息や梅真白	津田 京子	山波に包まれ抱かれ熊谷草	松井みさ子		
登山道這うごと迫る冬の霧	鶴田 京子	真向に夏の雲おく神の山の場	武子		

高柳 克弘 選

特選

村芝居 静御前は俺の孫 神奈川 青木 喜代江

今も歌舞伎や村芝居を通して語り継がれる義経の悲劇の物語。兄頼朝の手を逃れて奥州へ落ちのびる義経を助け、時間稼ぎのために舞う静御前は、物語に華やぎを添える。その役を自分の孫娘が担ったという喜び、誇らしさに溢れた一句。「我の孫」ではなく「俺の孫」としたことで直情が伝わる。

マクベスのごとく手洗ひ杉花粉 神奈川 高瀬 雅彦

王を暗殺し、その手を汚したマクベスとその夫人。その後夫人は眠りながら手を洗う異常行動に走る。シェイクスピアの名作を元にながら、オチが「杉花粉」だというのが可笑しい。花粉症の作者は、外出先から帰ると必ず手を洗う。強迫観念にとらわれたかのような自分を戯画化した。

……題詠「山」……

母の日や山の奥まで宅急便 鹿児島 白男川 孝仁

母の日の句は、思いが過ぎて甘くなってしまう傾向がある。この句は「山の奥まで宅急便」という、淡淡としたフレーズが良かった。物流が発達して、山奥まで期日通りに贈り物が届く時代になった。母というよりもむしろ配達する人思っているという、ちょっとしたずらしが面白い。

秀作

学ぶ子に氷柱をぬけてくる光
みちのくの桜の枝の氷柱かな
家事手抜き今日は勤労感謝の日
乳房拭き乳首ふくまず磯竈
抹茶アイス今日鎌倉は同じ色
妹へ点けては渡し庭花火
白きもの建国の日の畑濡らす
風音も凍てて梢にとどまれば
はるのみづ一滴宇宙濡らしけり
暖かしましてややこが膝の上
父拾ふ青水無月の骨拾ふ
郭公や猿一族の露天風呂
白梅忌としたき父の忌梅香る
少女にも抱く番の来て白兔
砂防林新入生のざわめきか
きさらぎの月光ショールームの新車
魚は氷にいつかは姿三四郎
猫の子の貰ひ手探す記事を書く
鎌倉やなにはともあれ初鰹
年忘れ古老も踊る U S A
……題詠「山」……
壺焼を待てば夕富士海の上
教員の卵集へる春の山
古城めく山のホテルの茸汁
痛は初期山眠るべし生くるべし
山笑ふここまで来てもオムライス
新潟 金子加津久
山形 富樫 正義
栃木 郡司 紀子
神奈川 塚本 治彦
埼玉 山田 収一
福井 野村香代子
千葉 高瀬 竟二
群馬 島崎多津恵
神奈川 三玉 一郎
東京 保屋野 浩
東京 曾根新五郎
千葉 鈴木 武
兵庫 村井みさを
東京 伊丹 妙子
秋田 五十嵐祐子
千葉 大平さゆり
東京 阿部眞佐朗
岡山 池田 純子
三重 杉山みどり
愛知 芳賀 松里
神奈川 諸星 泰子
石川 泉 耿介
群馬 田代 東代
和歌山 北村 薫
神奈川 山田 蹴人

◆佳作◆ 掲載は氏名五十音順です。

梅の種飛ばし大会夕刊に	愛洲みよし	生家なる古き湯呑の新茶かな	今泉 忠芳	春立ちぬ鎌倉彫りの手鏡に	小澤 國男
定食とお膳の違ひ立子の忌	相原 一枝	老いてなほ前へ前へのラガーかな	井元誠司郎	山独活でよければ一杯飲めと言ふ	小田 金幸
人間と縁を切りたし冬の海	浅香 佳子	砂浜に線香立てて送り盆	岩城真理子	太陽成分たつぷりと田に鋤き込みぬ	尾堤 輝義
文鳥のやうな子の靴風光る	浅木 ノエ	新時代来る立春の波の音	岩崎 絵美	唯ひとつ妻から貰ふバレンチョコ	片上 強
秋の川そよぐ藻草に稚魚添へり	阿部 和子	室咲の蕾かぞへて厨ごと	岩崎 秀樹	告白を急がぬ夜や春灯	加藤 申女
湯上りの臍よりしづく嬰の夏	安部みさ子	薄氷や曖昧模糊の十五歳	上田 清江	晩年てふ部類になりぬ着ぶくれて	金澤 恵子
寝汗かきリンカーンと話す初夢よ	有田 徹雄	まず記す息子の来る日初暦	牛久保悦子	冬晴やコートを通る鳥の影	金子 絹子
冬ぬくし気安く夫に頼みごと	飯塚 柚花	啓蟄やカフェと春樹とモダンジャズ	有子山俊之	産土を誇る球児や長崎忌	金子 サキ
もののふの押し寄せている木下閣	五十嵐 守	書初をほめる人亡き八十路なり	薄上 則子	古い二人コンビニおせち三箇日	神根 信
地球儀は大方海や入学す	池田 純子	遠足の菓子ほぼる子地図みる子	内久根真也	吹き荒るる風に手もなき大枯野	上村 篤彦
蛙鳴き睡眠薬の要らぬ母	池田 純子	雪のなきセンター試験日和かな	宇乃美津子	九十路おれもでんでんむしとなり	川島 孝一
若き日の文うづもるる丘に蝶	磯田佐多子	沛然と白雨にけぶる伽藍かな	江口 來童	つるし柿六つ大事に老夫婦	川名せつ子
負ふこともなく母逝かしめし月朧	市毛 文夫	米寿越えめおと共々去年今年	江崎 清	初鶏や今年で村を出る少年	川村 一重
何れもこれも紐取れて無し古白扇	市場 泰輔	ぐい呑やほどよく焼けた初秋刀魚	大石てるゑ	柚子香る五右衛門風呂の夕べかな	菊地 孝也
紅葉燃ゆ妻は任侠映画ファン	伊東 明夫	小さき手に握られてゆく紙雛	大川 千草	ドア開き寒気ドツと電車乗る	橘川 昌弘
昨日見て今日見て坂の寒椿	伊藤恵美子	底紅の底に昨夜の雨のつぶ	大河原倫子	襟元をゆるめることのなき冬芽	木下 涼薫
此方より彼方が好きよ蝶が舞ふ	伊藤 如風	そろわねど七草粥や今朝の膳	大島 糸子	女子なれど現場監督夏旺ん	木俣 道子
ぬんめりと烏賊のわたぬく夕おぼろ	伊藤 柳香	お花見や姉の弁当母の味	大場 律子	春寒や夫亡き後の厨ごと	木俣 道子
ふるさとは雪の中なり母一人	井上 和子	すこやかにほがらかに梅満つる家	大林 翠	終戦日五歳のあたひ八十路かな	君塚 房子
春風や海一望の寿司処	井上 千秋	再会すアダム・スミスや煤払	岡本 正	ペンライトのごとくに風の茅花かな	日下出水美
くちびるに一片の雪ちくりとす	茨木由己子	あれこれと用思ひ出す炬燵かな	奥村 芳弘	蝶凍てて化石のごとく石に浸む	草壁 昂

せつかちな母から電話日脚伸ぶ	国代 鶏侍	さわやかに家族となりぬ盲導犬	佐久間早苗	うぐひすや大炬たつぶり湯のたぎり	鈴木美恵子
雪国やどこにもゐない雪だるま	久保奈緒世	咳き込めば途切れ途切れの電話かな	笹野 久代	ひよつとして人のつもりが寒鴉	諏訪美和子
天高し虚子の教えは鎌倉に	久保田敏子	手術待つ子に春色のパジャマ買ふ	佐藤 志乃	万葉の歌を色紙に初硯	関 一枝
紙の雛壁にもたれて立ち給ふ	来栖多賀子	寺書院夏うぐひすを聞きながら	佐藤 信子	ドアノブは冷たし頭痛治まらず	関 美奈子
零さじと思えど零る雛あられ	源通ゆきみ	朧月ピーターパンが横切りぬ	佐藤 廣枝	アスファルト灼け営業マンの靴の底	関 美奈子
木の芽時女心は乱気流	小泉 染生	筆圧も撥ねも変らぬ賀状かな	佐藤 正博	青き踏みいざ鎌倉の海を見ん	関口ひろ子
冬の夜や辞書のわ行の肉薄き	神戸 千寛	山茶花のこぼれて猫の動きけり	実沢 愛子	名曲に優るせせらぎ藪柑子	瀬部 康子
大仏に潮騒遠く実朝忌	古賀貴美代	由比ヶ浜古き寺より水着の娘	椎原美佐子	鎌倉の星野立子の帰り花	曾根新五郎
定家には定家の愁ひ雲雀鳴く	小林香代子	ひとごとと思ひし雪に転びけり	塩野 恒子	園長の打たれ上手や年の豆	高久 敏子
南海の底は靈廟終戦日	小林寿恵王	新緑の北鎌倉やいなり寿司	泉 耿介	今ならばきつと良き妻木の芽和	高田 英子
剪定の葡萄の樹液光る朝	小松 和美	鎌倉に無きもの無くて残暑かな	芝田 太	パン二斤提げて日傘の銀座かな	高田みづ紀
有り余る知識におぼれ餅こがす	小松 芳子	ふらここも凍りつきたる夜の園	渋谷谷み子	な摘みそゑくぼのやうな冬すみれ	高橋 佳代
スマートフォン電池すぐ切れ十二月	小宮山里子	顔立ちをすっかり忘れ賀状書く	島津 義浩	子の家族泊めるため干す蒲団かな	高橋 裕子
ていねいに積もるや古都に春の雪	小牟田靖子	ひと気なき部屋の広さや風邪心地	清水 洋	行平で七草粥を炊く女房	高橋みつる
早蕨を一本入れてミニブーケ	小六 潔子	若き日の君の言訳ソーダ水	下和田真知子	クラス会政局論争息白く	高橋 悠蜻
折鶴のごとく座る子雛祭	近藤 康	はらわたに勤労の味秋刀魚食ふ	将口 和子	螢火のひとつは橋をよう越えず	高原 晴子
ヘッセの空へ風船はなつ華燭かな	斎藤千寿子	大マスクはずして教師説教す	白岩 賢次	スーパームーン廂間の猫の恋	高山 千恵
春風や虚子の一〇〇句を誦誦す	三枝 青雲	教師妻バレンタインの紅淡く	城田 嘉三	問題児自分を語る土筆かな	滝村 実
一行を待たせてすすする心太	坂井 正巳	大きくさめ前の頁に戻りけり	杉本恵美子	焼かれたる骨まで食べよ寒雀	滝村 実
ブロッコリー茹でる鍋底春立てり	堺 美典	風やさし文学館の萩の坂	鈴木 晶子	山の子の乗る江ノ電や夏休み	田口 穂心
新妻と江ノ島巡り焼柴螺	坂口 智弘	むだ使ひそれもよからう春立つ日	鈴木恵美子	鎌倉や恋の色ある萩の花	竹井 正己
挿り粉木のリズムにのせて春の歌	崎田 宇城	鎌倉に苧環の花咲く日なり	鱈 鉾志	掃除機をかけて秋の蚊出て来る	竹内 恵子
離職の日シヨートケーキの冬苺	崎谷 弘子	菜の花や軽トラツクの老夫婦	鈴木 正子	認知症迷はず飾る雛かな	竹下 和宏

魚は氷に上り禁煙誓ひをり	竹中 昭子	あじさいや小雨の中を人力車	永田 証真	ベランダで作りし冬至南瓜かな	野村 由
新橋に電車が着きておでんの夜	竹俣 修	冬夕焼スピードくじの小さな福	永塚 尚代	短夜の夢は大陸逃避行	橋本 収三
針仕事更けて障子に雪を聞く	田島 貞子	一輪の一輪だけの椿落つ	中畑 耕一	夫に杖あづけて妻の初手水	長谷川 宏
初蝶来近づいてくる子の帰国	橘 光江	初めての京都の桜並木かな	中村 愛	無口にて不仲でもなし蜜柑剥く	羽立 和子
独り居も林檎はいつも八等分	田中 公子	海風や桜の芽ぶく段葛	中村 宏子	ロボットがロボット操作聖五月	花形きよみ
蜜柑剥く寂しいときはきれぎれに	田中 茂三	子供の日なるまい子等の荷物には	中村 智善	水仙花モーツァルトの誕生日	羽田 孜子
岩塩は地球の味か木の芽みそ	田中哲山人	治聲酒をすすめられみて首肯かず	中村代詩子	鈴蘭の届けられたる保健室	濱田真知子
柿うれて夜明けの土手に親子猿	田中リツ子	受験生村の神樹に触れて発つ	中本きみよ	教え子はもう還暦か木瓜の花	羽矢 真人
鳥雲に無事に着いたら知らせてや	種井 保博	相席もまた老夫婦菜飯茶屋	仲屋 三造	地図広げゆく先なぞる春の旅	羽矢 真人
生きてゐる鮑を見せて鍋に蓋	塚原味紀枝	そそくさと逃げ出す波止の孕み猫	中山 幸子	灯の消えぬ霞が関の月朧	林 達夫
土砂降りの中祈りけり沖繩忌	塚本 治彦	部活の子早起眠りの聖夜かな	中山 十防	トルソーのごとく剪られて大冬木	原 雅
カフェオレを飲み干すまでの春の雪	辻 泰子	甥からのキルトベストをありがとう	那須 伸子	鶯餅並びてよりの鳥の声	原田ミチ子
うら山は俺の縄ばりうどばたけ	辻川 登	初富士を七里ヶ浜に拝みけり	奈須田雅代	われガリバー土筆の国に目覚めけり	樋口 昇る
昏がりに政子の墓やさへづれり	露木 伸作	球場にドカンとひとつ雪だるま	名雪 國男	おぼろ夜や牛曳くやうに妻を曳く	樋口 昇る
うららかや白寿に紅の死に化粧	出口 裕興	ファクシミリかたかた鳴れり昼寝覚	奈良 弘	たんぼばや縄の電車の通り道	毘舍利愛子
武道始めファイル片手に進行係	寺畑 好春	来世とはまぶしき言葉冬至粥	西本 文子	がむしゃらに広がる宇宙夏来る	毘舍利道弘
えいぶりるふーるであつてほしきこと	藤堂くにを	老いてなほ一耕人でありにけり	西山 勝男	止まるならてふてふ母の指に來い	風街ゆう子
子猫くるメイנקーンの名はノエル	戸田 絢子	晩節を土と向き合ふ露涼し	西山 勝男	冬ざれや明かり少なき郷に帰す	日比野永子
マイクロバスで結婚式へ五月晴	豊田 民子	山里の 篋深く春動く	二藤 覺	春近しローマの古地図買ひにけり	平島 照雄
自転車の僧衣ひらひら畦青む	長岡 和恵	湯たんぼが繋ぐ玉の緒子牛生く	額田 昌安	銀やんまわれの行方や茜雲	平地 俊雄
ひらめきは老軀にもあり風光る	中川 計介	高原の音楽会や星涼し	能田 孝昌	寒の水満たして地震の国に住む	平野 宏
春風や母よりえくぼ受け継ぎて	中川すなを	小数点三位の金利日向ぼこ	能田 孝昌	脳トレのスマホのピアノ花菜漬	平林 佳治
男の子にも家庭科ありて針供養	中澤 安子	春の野やサスペンダーの子等走り	秀 遊	ふくろうが潜んでいそ書架の奥	深谷 泰子

病み上がり散歩がてらに日記買ふ	安房の海望めばしかと初富士ぞ	図書館にめざす古書あり一葉忌	持ち帰る昨日の時雨旅の傘	初蝶や貝殻ほどの影落とし	まず胡瓜食みて上れる実家かな	カラオケでまたも一曲昭和の日	叩く人上手にほめて西瓜売る	新聞を笠に韋駄天春しぐれ	口口に立子を語る雛の宴	あれこれと地域のお世話トコロ天	人生は学びの旅や雪降り積む	わが庭に摘みし桜茶結納す	子等からのメール見なおす日向ぼ	家族皆日曜の朝豆ご飯	酷暑なりゴツホの顔をして歩む	思ひきり処分をしたる登山靴	たんぼぼやジーパン叩き干す漢	かまくらに古き経師屋梅三分	肥荒れを気にする妻ぞ実南天	地虫出づ縄文土器の破片出づ	うぐひすや竹の門真青なり	我さへも王妃とならむ薔薇の園
福川 敏機	藤井 黎子	藤枝 信雄	藤枝 信雄	藤岡 定子	葉山さくら	古屋 輝	堀 昭治	増田 信雄	柘野 雅憲	榎本 俊明	松生 彌知	松浦美智子	松浦美智子	松浦美智子	松枝 勝一	松木 溪子	松宮 一仁	松山三千江	三木 甲一	三嶋 幸雄	溝渕 淑	箕輪 京子
ひとり居の喜寿の正月生きようぞ	手作りのケーキも焼けて雛の宴	自転車で巡る鎌倉若葉風	雲雀野に来てあふれ出る涙かな	寒の夜ボタンを押すと風呂沸きぬ	ひと握りもうひと握りつくし摘む	野ねずみの行き交ふ垣を繕へり	恋猫に鮭缶分ける変声期	傷癒えて二月礼者となりにけり	初恋の両手で掬ふ岩清水	大仏の耳より生まれ夏の蝶	メモを持つ夫の買物日短	大仏の裏も表も春休み	肩甲骨少年となり裸の子	講釈も楽しかりけり新茶汲む	長身の子の喉仏春日影	紙魚あとや母の手書の稽古本	黒百合もここしき岩も詩のごとし	木枯しや石塊と化す遭難碑	たんぼぼやあした転校する姉妹	……………題詠「山」……………	山独活に地酒を以て歓待す	銀飯を山と盛りたる敗戦日
宮崎 尚範	目黒 輝美	森 歳勝	森 秀子	森本 友子	森若 初恵	家治 綾子	矢島 清	屋代 義男	山内 健治	山口 楓子	山口 勝	山田 蹴人	山本加代子	山本加代子	山本 美子	吉田 利夫	若林 正人	若林 正人	渡邊 安雄	青木 一夫	朝川 晴也	
アルバムのはげまし転校す	父写す母の笑顔よ夏の山	人さりて煙雨にとほき山桜	雪を聴く夜更けにひとり山の宿	風を得しフランス山の風車	雲間より朝日射したる山葵沢	富士山に向かひて泳ぐ相模湾	美人ある会みな参加山笑ふ	咳払ひほどの雷山笑ふ	初山河一句こころの添木とす	山独活の匂ひ軍手に残りけり	鉄塔を高く光らせ山眠る	バレンタイン愛山ほどのサラダかな	夕映えの一番奥の山に雪	山頭火の喉潤しし噴井かな	茸出づ名もなき山の底力	山賊もまたぎも其処に山眠る	古稀記念登山は富士の他非ず	山の奥そのまた奥の月氷る	今日も暮るる桜吹雪の源氏山	富士と生きあとはオプシオン涅槃西風	乾坤に豊後二峰や鳥雲に	
網野 香琳	有田 芳美	安藤久美子	磯田佐多子	伊東 明夫	梅原 清音	太田 邦子	大津 浩	大矢知順子	小川 鶴枝	加藤 哲	川名せつ子	川村 一重	河村 葉子	菊地 孝也	木下 涼薫	清岡 久恵	草分 蠢爾	國武 浩之	熊谷 貢	劔物 劔二	後藤 史子	

追う背中離れずねばる登山かな	小林 寛久	初 茜神在る山の噴く煙	永田 満男	虚子の忌や見渡すかぎり山ばかり	目黒 輝美
伊豆天城もの語り生む白雨かな	小屋 幸保	老いの恋山あたたかくふところに	中村 文子	お日様に笑顔描き足し春の山	目黒 輝美
山里の小さき母と葱を抜く	金 民子	青春を育みくれし山笑ふ	夏目 惇子	役目終へ畦に寝そべる案山子かな	森本 美和
許せよとかじる岩魚は山の幸	斎藤正太郎	そうですかこいつしよさせて梅の山	仁木ひさ代	山靴の傷なでてをり春愁	藪田えり子
我を入れふんはり浮くや春の山	齋藤 伸光	山の子は山見て育つ雲の峰	西本 文子	幾山を越えて金婚春の雲	山口 勝
春着の子ジャンゲルジムの山のぼる	渋谷きみ子	とつぷりと海暮れ花の山もまた	西山 敦	鳶高し五山の木々の芽吹き急	山敷 信子
初富士やコックピットのアナウンス	清水 和子	故郷の山は変わらず紙風船	西山 節子	山々に翼生えたる桜かな	山田 知明
幾山河越えたる父母の茄子の馬	志村 美好	ほくそ笑む山の当たりし受験生	能田 孝昌	祖母山の明けそめゆけり稲架襖	吉岡 亨
ハイマツに干す山小屋の布団かな	迪方 温峇	故郷の冬山描きて入賞す	野村 由	片足の揺るるズボンの案山子かな	吉田 千種
たのもしき昭和の猪首初筑波	鈴木 砂紅	星流るおつぱい山の夜の闇	濱田 朋子	鬼よりも怖きジェラシー山眠る	米重 初枝
山肌に貝の化石や青葉木菟	鈴木 武	今朝もまた山が見る山は春	羽矢 真人	登山靴ひきずり来たる通夜の客	若林 正人
よく晴れて寝姿山の揚雲雀	鈴木美恵子	お腹なでもうすぐですと春の山	林 美恵子	猿山の猿のにぎはひ春心	和田 郁江
山裾に住んで老いたりキャベツ畑	高石 時子	さはさはと芽吹きのけはひ山の墓地	阪東 静子		
山雨急雷火落して去りにけり	高木 峯子	杉花粉浮かべて山の露天風呂	坂東 文子		
礼拝を告げるカリヨン春の山	高畑 半身	ハイヒール脱ぎ捨て目指す青嶺かな	平林 檸檬		
つつじ山手書きの地図の案内板	武井 猛	大口をあけて火の山笑ひをり	藤田 克弘		
山菜萹やマンモス校の昼休み	竹田しのぶ	吉野山秘仏も拝し花の旅	本田 久江		
ふむふむと言ひつ枝豆殻の山	立石 幸子	山なりのボール幼へこどもの日	前 九疑		
北風や山に風車の泣き明かし	段田 晶雄	映画館出て皆遠目秋の山	松浦美智子		
山焼く火胸にも燃やし上京す	長尾 登	目白来る大きな窓の山のカフェ	松本 信子		
山吹や暮しつましき長寿村	中込 儀一	散骨の山や今年も白すみれ	三浦 美苗		
雪とかし作るラーメン山スキー	中澤 草子	富士晴れてバレンタインデー共白髪	見上 都		
仔犬のぞく少女のリュック山始	中筋のぶ子	目をつむり山廬の春のただなかへ	三玉 一郎		

星野 高士 選

特選

巫女舞の鈴 八方へ春寒し 埼玉 塩津 蓉子

俳句は季題を中心に詠むということが要ではあるが、季題をなぞる様に説明してはいけない。巫女舞は神官が祝詞などを唱えているときの舞でいかにも有難いもの。神鈴が八方へ響く時は実に清々しい。春寒の中でその舞や神鈴の音に相對している作者像が浮かぶ。八方も又縁起がよいのだ。

春宵や鎌倉彫の影 神奈川 野口 聖

日本にもいろんな塗物や彫物もあるが、鎌倉彫は透し彫、浮彫があり漆の色も最初は鮮やかだが、年月と共に深味のある色にもなる。そしてお盆の影も段々としつかりした影を作るのである。青春の楽しい一刻の中でそこだけに集中して得た滋味い作品。うまく省略ができていて季題にぶれがなかった。

……題詠「山」……

谷戸もまたもののふの道山桜 東京 高橋 きよ子

この作品の谷戸はいろんなところにあるが、特に鎌倉辺りに地名として現存し、関東地方の低湿地など。鎌倉時代は幕府があり武士達が往来していたのである。谷戸だけ読むと単なる細い道を想像するが、戦の現場でもあった。それ等を見下す様に山桜が咲き誇っているのだ。時代を越えた作品である。

秀作

説法を聞くや聞かぬや虫の鳴く 神奈川 細川 幸正
 春雨や小町通りを僧急ぐ 埼玉 神田 進
 鎌倉と予定に入れる二月尽 東京 近藤 精一
 図書館にめざす古書あり一葉忌 神奈川 藤枝 信雄
 地に触れて水となりゆく春の雪 神奈川 杉山 通幸
 紙風船ころがして部屋軽くなる 兵庫 渡部 小凜
 夕桜静 御前の舞 偲ぶ 埼玉 小暮 肇
 石舞台石は語らず夏の月 福岡 古賀貴美代
 山峡のただ一軒の葉喰 滋賀 平岡 啓助
 石狩の大地貫く川へ鮭 福岡 村田 浩
 鯛の径あり谷戸の登り窯 群馬 吉井美代子
 曼陀羅を菩薩抜け出る朧の夜 東京 岡田 敏彦
 風鈴の音色選びに迷ひをり 静岡 西村 斗潮
 餅花のちらりと見ゆる楽屋口 石川 蔵 堯子
 建国の日の氏神の古幟 山形 佐藤 豊光
 教科書も蔵書の一つ秋深し 岡山 岡田 邦男
 豪雪や人も訪ねて来なくなり 新潟 橋詰 利夫
 ぐい呑やほどよく焼けた初秋刀魚 神奈川 大石てるゑ
 春光や虚子先生の祖父への書 東京 森 孝枝
 万緑や木曾の五木をほしのまま 東京 水澤 眞澄
 ……題詠「山」……
 山伏の歩の緩みたる初音かな 群馬 武藤 洋一
 山門を浜へとつなぐ日傘かな 東京 貞住 昌彦
 虚子の忌や見渡すかぎり山ばかり 東京 目黒 輝美
 山城の物音もなき朴散華 富山 四十物文化
 余寒なほ五山一位の大伽藍 神奈川 宮岡 弘

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

ふらここや別れの言葉言ひ出せず	中村 敬	昨日見て今日見て坂の寒椿	伊藤恵美子	御朱印の墨のきはやか散紅葉	大内田芳乃
とつぷりと浸る余寒の出湯かな	相沢正志斎	今在るは女流の先師立子の忌	伊藤可代子	薪能はじめは小さき鼓の音	大川 千草
雲の上に雲の流るる梅日和	会田 比呂	春風や鳥の工事の槌の音	伊藤 秀月	小さき手に握られてゆく紙雛	大川 千草
定食とお膳の違ひ立子の忌	相原 一枝	寒行の鈴の音響く古利かな	伊藤 有	汲み置きのパケツの水に寒雀	大久保螢雪
山下清鎌倉の大花火	赤繁 忠弘	風光る人影動く舟溜	伊藤はじめ	炎昼や百年櫻直立す	大島 幸子
海鳴りの漂つてゐる波の花	阿久津勝利	天園を下りて梅の香瑞泉寺	伊藤 正博	一湾を走る客船春近し	大島みよし
猪鍋や祖父手作りの自在鉤	阿久津勝利	誰もぬぬ墓に漂ふ秋のこゑ	稲津 順子	鎌倉の紅梅淡き恋の色	太田 邦子
水音の少し変わるや芹を摘む	阿部恵美子	侘助やひかり綾なす谷戸の空	稲葉 次雄	青饅やひとりの膳に向き合へり	大塚 露風
縁側の明るさ戻り山笑ふ	阿部 義勝	息かけて拭く立春の窓ガラス	稲葉 良雄	紫陽花のいろ移りゆく夜の庭	大出 豊子
うきうきと何も買はずに苗木市	あまの樹懶	下宿屋の声入れ替る弥生かな	稲畑 介廣	谷風と水のささやき花山葵	岡 白雲
手のひらの雛に声をかけにけり	荒井ハルエ	松原に飛べぬにはとり春寒し	今井 眞弓	境内を走る落葉も神のもの	岡田 邦男
夕薄暑小町通りにカレーの香	荒田 栄子	老いてなほ前へ前へのラガーかな	井元誠司郎	寿福寺の桂敷踏む虚子忌日	岡部いさむ
夕飯のメニュー決まるや雪催	飯島 晴美	江ノ電の軋む鎌倉あたたかし	岩田 勝	春を待つ賀茂の飛石水の音	小川 鶴枝
豆撒いていつもの暮らしコップ酒	飯田 真二	雲水の 一列にゆく春時雨	岩本 弘	素直にはなれぬ訳あり木瓜の花	奥住 士朗
もののふの押し寄せている木下閣	五十嵐 守	船笛の尾を引いてゐる去年今年	植木 英雄	春立ちぬ鎌倉彫りの手鏡に	小澤 國男
遠足の帰りのバスに眠る子等	池田 純子	鎌倉の駅舎の明かり冬の雨	内久根眞也	曲屋の鉄瓶重し炭を継ぐ	小田 金幸
春愁や過ぎし時間にふと気づき	池田 純子	鍋底へパスタ崩るる二月尽	内田 創太	振り向けば少年の吾唇気楼	蒼 鳩
深雪晴田んぼの中の一軒家	石川 明	立子忌の風の匂が仁王立ち	梅原 清音	汗ふきて山門見仰ぐ老ふたり	小野寺信雄
夜を鳴く鎌倉宮の杜鵑	石田 康明	湖の朝の煌めき蜆舟	梅本登志子	春の水集めて滾つ瀬の光	織田 雅子
冬日さす鈍色の果て古戦場	石塚 明夫	音なして稚鮎がのぼる郷の川	榎 正好	長谷寺や参道カフェのかき氷	笠原 榮
春蟬やかかけ込み寺の門狭く	井手 浩堂	初蝶の過ぎて樹間の見えて来ぬ	大石 坦	句梵鐘一打は春の鎌倉へ	笠原佐千子

言靈の幸合ふ国や梅白し	門谷 とも	売り札の文字鮮やかに春大根	小松 光希	大きくさめ前の頁に戻りけり	杉本恵美子
虚子立子椿とつづく春の海	金子加津久	一列に歩く歩板や水芭蕉	小松 芳子	庭先の青葉がくれを行く電車	杉山みどり
鳩サプレー食べては花火見る浜辺	金子 照	口角と気を引き締めて初鏡	小宮山里子	日蓮の説法塚や賜猛る	鈴木三光子
鳥帰る頃か大仏の背の小窓	菊地 水酔	風鐸を躲し乱舞の秋の蝶	斉藤正太郎	貝寄風や女漁師の力瘤	鈴木 武
薫風やすずめの宿の冠木門	上村 順子	立子句集受け継ぐ幸や春の雷	齊藤たけ子	鎌倉も北鎌倉も解夏となる	鈴木智香子
大仏の裏もて加護の涼しさよ	上村扶佐子	早春の谷戸にひとすじ薄煙	斉藤 洋美	花の雨鎌倉夫人蛇の目傘	鈴木智香子
艶やかに能面光る無月かな	川崎 和啓	虚子立子偲ぶ鎌倉時は初夏	斉藤 睦子	どの窓も潮風抜けて夏館	須藤恵美子
父の日や机に遺る父の文	川崎 紳一	朝市の浅蜷の数を値切られず	桜井 青尚	一幅は立子の句なり鮫鱈鍋	角 達朗
妙法寺石段歩む春の風	TKC98	立春の卓にこぼれし粉葉	佐々木勝子	ドアノブは冷たし頭痛治まらず	関 美奈子
潮騒の届く屋敷の吊し雛	川田 潔	早春や床屋の匂いして帰る	笹倉 丈夫	陽炎や草の匂いの甘くなる	関根 瞬泡
春あけぼの汀に残る虚貝	菊山 静枝	建長寺正殿までの春の風	笹野 青陽	春めける町にシネマを見にゆかん	瀬端 忠男
二番線ホーム緑雨の別れかな	岸上 玲子	江ノ電の車庫はがら空き燕の巢	佐藤 無風	大寒のいざ鎌倉の投句箱	曾根新五郎
探梅の谷戸は水音ばかりかな	木原 登	春風をまとひて確か原節子	佐藤 美保	飛石のひとつは小さき初明り	曾根新五郎
十一月の空の芯より海の音	木原 登	寒早富士川に立つ砂埃	佐野 博子	今ならばきつと良き妻木の芽和	高田 英子
女子なれど現場監督夏旺ん	木俣 道子	ふるさとの雪をのせ来る列車かな	座間 英幸	鐘霞む五山の谷戸の水の音	高野 知作
大空の深きへすつと白日傘	工藤 晴美	梵鐘の一打に動く梅の空	澤田 麻里	怒濤音礁にひびく五月来る	高橋 央尚
立子忌の風緩やかに身八口	工藤 芳枝	由比ヶ浜古き寺より水着の娘	椎原美佐子	彩りの百花百樹に風薫る	高橋 浪子
せつちちな母から電話日脚伸ぶ	国代 鶏侍	風音も凍てて梢にとどまれり	島崎多津恵	岩燕鎌倉の海裏返す	高橋葉菜絵
手のひらに地球の重み寒卵	久保田久枝	廃校の四隅の浅きプールかな	島津 義浩	普陀洛の海へ流るる落椿	高畑 半身
駅を出て山それぞれに冬日あり	熊谷 貢	ほつとしてもて余す夜のビールかな	清水 洋	流木は一夜の褥 <small>シロ</small> 鳥帰る	高部 久子
宿坊の無言の夕餉しずり雪	小杜 芳野	緋袴の裾少し上げ春時雨	清水ゆみ子	野梅咲く思いのままといふ至福	田口はつ江
少しだけ浮き世をのがれ蛍の夜	小泉としゆき	麗かや立子椿の文字似たり	神通美美代	紅梅の枝先はるか日本海	竹多久美子
先生と呼ばるる集ひ桃の花	合田マサル	郭公の跗が撥ねる廃校舎	進藤 鳥人	鎌倉の背山にひびく初音かな	竹中 友弥

新橋に電車が着きておでんの夜	竹俣 修	嫌な事酒で紛らす蟬時雨	鳴滝 暁	雲水の袈裟に一ひら夕桜	坂野 たみ
初蝶のなかなか去らぬ鏡石	田中テル子	谷戸風の抜くる茶房や吊し雛	西田 啓子	六十年祀る矢倉や月朧	坂野 たみ
僧列を花へ見送り裏小町	田中 道敏	しつとりと古都鎌倉の秋の雨	西館 紀子	細腕の傘に重たし春の雪	毘舍利愛子
行く雁に手を合はせたくなりにけり	玉川 憲子	流鏑馬の放つ一矢や春立てり	西村 久子	実朝忌かなもじで吹く風の音	毘舍利道弘
花の声ニコライ堂へあと少し	輝	百歳の未踏の祈り初御空	西本 文子	海沿ひの食堂の椅子風光る	風街ゆう子
鎌倉街道冬川越えてひた走る	玉造千恵子	百年の柏楨のうろ寒満月	西山 節子	風呂敷のゆるき結び目花ぐもり	日比野さき枝
はつきりと物言ふ人や寒落暉	田村 清美	品書きは見ずに鍋焼まず頼む	額田 昌安	油壺溢るるほどの春満月	平川 菊哉
一声の残響山に時鳥	千原 道子	春立つや吾を励ます吾のをり	野崎 高子	坂町に新酒の香る深廂	平野 孝純
生きてゐる鮑を見せて鍋に蓋	塚原味紀枝	鎌倉を真二つに切る寒さかな	野島 巧休	海苔簀にひたひた迫る夕日かな	蛭田 啓子
寒雀群るる永福寺の跡に	露木 伸作	時雨るるや杜の中より寺の鐘	秀 遊	春水や師の句版画の届く朝	深沢 愛子
寅さんが居さうな蕎麦屋夏のれん	寺島ゆうこ	梅東風の香に起こりたる越天楽	萩原 豊彦	冴返る石工の叩く鎚の音	福井 英敏
望郷や梅の香束ね風過ぎる	富樫 幹	冴返りつつも確かな一歩あり	土師 章子	独り居の点字の指に伸ぶ日脚	福井 宏郷
金沢にひとりの夜や花の雨	豊田 民子	鎌倉の余寒に虚子を偲びをり	橋本世紀男	颯爽と紺の背広や春一番	福田 隆
やはらかき日差しに開くやぶ椿	中川 和枝	木喰の仏微笑む里の秋	長谷川菊男	玉砂利の響く参道蟬時雨	藤井 淳一
夏の月ゆらりゆらりと由比ヶ浜	中込 儀一	水打つて托鉢僧を迎へをり	花形きよみ	推敲に推敲重ね湯ざめかな	藤井 敏子
朧夜やシャガールの絵に迷ひ込む	中坂 和子	鳥帰る地には前方後円墳	浜田はるみ	段葛ゆるり横切る孕みねこ	藤代 康明
天敵も無くて夕暮れ浮寝鳥	中条 護	空と雲映して池の水温む	濱名 博光	白梅や文士の眠る札所寺	藤沼 花代
修復の門司港 駅舎初燕	中司 和子	いろいろな鳥が来ている梅の花	林 和子	鳥交る谷戸の深きを移りつつ	富士原康子
就中威厳のありし臥竜梅	中畑 耕一	江の島に白波投げし春疾風	林 博史	まだ誰のものとも決めず毛糸編む	淵上 淳平
八重椿ぼつりと落つる夜のしじま	中村 宏子	夕まぐれ初音聞きたり化粧坂	原 扇泉	神木の春待つ影となりにけり	古郡 孝之
一尺の水の深さに芹を摘む	名越 順子	立子の忌遺愛の机椅子を撫ぶ	原 和三	ぶらりゆく虚子の鎌倉梅日和	古郡 孝之
この里の水が好きよと蛸とぶ	那須眞千代	草萌の野辺にためらひつつ一步	原 清香	残雪や頑固なまでに野面積み	星 初美
改札口広げて盆の無人駅	成木れい子	珈琲の香りかぐかに花ミモザ	春木 啓子	太古より女はつよし梅一輪	堀田和歌子

正客をはんなり迎ふ内裏雛	鎌倉の一日の終る沙羅の花	湘南の波音ゆるき董かな	口口に立子を語る雛の宴	潮満ちてこぼれ若布のたゆたへる	水鳥や群れて静かに闇に入る	鶯を師の声として聴く墓前	淡雪の闇やはらかくしてをりぬ	蛸の上品に鳴く宮の杜	秘仏の扉開ける村役梅二月	住職に艶種ひとつ初時雨	大仏の薄目で見遣る猫の恋	汽水湖や白玫瑰のひとつと	晩涼や古刹の鐘の透きとほり	山鳩に窓のぞかれて春炬燵	改元の年ほのぼのと初明り	風光る古都の入り口二の鳥居	その奥のどこへ続くか木下闇	大仏の背に磨きたる冬の月	あんぱんもクリームぱんも買ふ子規忌	立子忌や母も娘も晴女	花祭りに句会重なる古都の寺	こちち良き風とたはむれ初蝶来
保理江順子	本堂 良衣	前島 康樹	柘野 雅憲	松尾 昭雅	松岡 孝子	松永 朔風	真鍋 貴子	丸屋 緑	三浦 貞葉	宮崎 洋	宮下 朱草	宮坪 勝美	宮永 泰俊	宮山 輝文	三輪 洋路	向井 眞子	村上 美恵	村田 郁夫	目黒 輝美	目黒 輝美	持田 市朗	百瀬 信之
花疲れ鯉は沈みしままなりき	ふらここや日の沈みゆく相模湾	舞妓等の襟足白し半夏生	テレビン油匂ふ新春絵画展	地球公転鎌倉自転夏隣	大仏も野山も染めて春の雪	鉄舟の筆文字偲ぶ若葉風	傷癒えて二月礼者となりにけり	西行忌雲の行方を飽かず追ふ	鎌倉の海の碧さよ春近し	人力車止まる寿福寺実朝忌	名刹の北條ゆかり梅が香に	武士の影ちらほらと白椿	切り通し守る都と山桜	囀の真ん中に居て一人占む	各々の辞書と歳時記掘炬燵	海眠るオラシヨの島の春の雪	堤防に芥残して水澄めり	対岸は安房の国なり懸け大根	待つと言う言葉は虚し思草	殿様と火焰太鼓を聞く夜長	大物を釣り逃したる目借時	たんばばやあした転校する姉妹
森 早和世	森 民子	森 はるみ	森 靖子	森山 健一	茂呂 典正	矢島 心月	屋代 義男	安武 豊	築田 いと	山口あや子	山田 十朗	山田 実	山本 道	山本 碩一	山本 礼子	山脇香代子	横山 基詞	吉井ほず江	米井みつ子	若林 正人	和田 郁江	渡邊 安雄
……………題詠「山」……………	山手線梅を抱へて乗りきたる	モンゴルの岩塩砕き山女魚食む	矢印の岩を頼りに夏の山	山並のかるき寝息や春隣	斑雪山くつきり影を放ちをり	バス停は山の中腹初山河	銀山を訪ふ人は稀初桜	草萌ゆる鎌倉五山切通し	日の当る山の傾斜や百千鳥	山よりの風に扇をたたみけり	山川の山より昏れて遅桜	山廬訪ひ涼しき風に吹かれし	一山を裏返すかに青嵐	水温む山湖に揺るる逆さ富士	富士山に向かひて泳ぐ相模湾	山水で洗ふ小銭や今朝の春	城山の表も裏も虎落笛	山越ゆる僧の草鞋や雪催	源氏山より早春の息吹かな	ゆつたりと坂東太郎山笑ふ	一山を一寺が統べて花浄土	山見えて遠き鎮守の祭笛
	木下 涼薫	秋本 哲	浅香 佳子	荒川 清司	石原かつ江	板津 松男	井上 良一	岩田 勝	内田 歩	遠藤 操	大石 坦	大垣鹿乃子	大川 千草	大久保文夫	太田 邦子	大沼 遊山	岡田 邦男	岡野 弘子	荻谷 恵美	河田 公枝	川村 幸子	神田 進

月山の峰より明くる初御空	工藤 稲邨	幾折れの山湖へ深む霧襖	関 雅己	帰省子に山河変わらず人変わる	松浦美智子
異邦人連なる富士の山開	九法 活恵	山彦となりし八月十五日	曾根新五郎	帰省子に山彦かへす峡の駅	松尾 一子
山の湯を貰ひ薺の粥を炊く	久保 厚夫	糠雨の一山覆ふ二月かな	高倉 早苗	新緑に鎌倉五山吞まれたる	松永 朔風
包み紙香りほんのり切山椒	来栖多賀子	山窪の余花くもりなし海も見え	高橋 央尚	山霧や羊の群を隠しおり	水谷 洋子
立春やほのかに匂ひ立つ山河	小柴 智子	鎌倉や天辺までも七変化	田中ユリ子	厳寒や峨々たる山の相寄らず	宮沢 一郎
初夢の山は故郷の八ヶ岳	小平 貞	山寺の急磴滑る余寒かな	富樫 正義	おおいなる山の彼方に冴ゆる月	宮地 昭子
菜の花や四国連山はるかなる	小松 芳子	一山の静けさに来て実朝忌	常磐 恵一	裾の田も骨休みして初筑波	屋代 義男
海拔はゼロ砂山の夏近し	小山しづ子	一山を越える難所や秋遍路	中澤 泰三	火の山の飛び火の如くななかまど	柳井 恵康
鳥海山に吹く風の声雪の声	金 道博	上皇の越えし峠路笹子鳴く	中筋のぶ子	針山をそのまま持ちて針供養	柳内 恵子
鎌倉の山滴れば海うごく	崎上 守	寒晴や多摩の山並み屹立す	野尻 瑞枝	富士山を削りし風か春の雪	山岸 嘉春
高らかに鎌倉山のほととぎす	佐々木志う	無茶苦茶に花粉ばらまき山笑ふ	萩原 豊彦	山峡の村を揺さぶる雪解水	山本 覚
靴裏に火山灰の感触花野行く	佐藤 溪洞	右府の忌や五山あまねく木の芽風	橋本世紀男	戦場の海山はるか花木五倍子	山本 美子
山寺の高き御堂に冬灯	佐藤 孝志	山桜活けて人待つ無人駅	橋本 久子	連山を緞帳となす寒夕焼	横田 昭子
春浅し少年山羊の乳搾る	佐藤 敏文	尼寺の山門親し岩たばこ	花形きよみ	夏山の宿のもてなし水と風	吉井ほず江
雑木山寒禽の声放ちけり	塩谷あい子	古里の山に向き会い土筆とり	馬場八代子	野も山も明るさ増して花御堂	吉田 昭子
山の端に触先を合はせ鹿尾菜刈る	下町 昭	山腹に代代の墓秋彼岸	平林けい子	裏山へ耳の傾く初音かな	吉田 博子
石磴の山蟻ふつと空仰ぐ	清水 初香	山霧の晴れて白樺林かな	藤井 黎子		
山菜莢は空の固さをほぐしをり	杉山みどり	連山をつなぐ鬘鬘冬晴れて	藤森せつ子		
大仏の後ろの山もしぐれけり	鈴木三光子	一升の米を量りて山笑ふ	古川よし秋		
山頂を目指す道標棚霞	鈴木 武	叡山の句碑の遠きや落椿	保永美代子		
穏やかに頼朝山河春立てり	鈴木智香子	吉野山秘仏も拝し花の旅	本田 久江		
月山の水まんまんと青田かな	鈴木 周子	山の日や飯盒一つ捨てきれぬ	本堂 良衣		
闇市にひと山五円終戦忌	砂川 隆	この山を境に雨は雪となり	松浦知恵子		

星野 椿 選

特選

あたたかや懐ふかき虚子全句

富山 四十物 敦子

（去年今年貫く棒の如きもの）虚子 この句に始まって虚子の句は読む人にあたたかさを与える。元号が変りこの句が貫く棒が心を打つのである。懐ふかくと詠んで、虚子の句を理解して下さっていると思うと嬉しい。

雲水の袈裟に一ひら夕桜

東京 坂野 ため

北鎌倉はお寺が多く、よく雲水を見かける。丁度寺内を下りてくる雲水の肩に一ひら夕桜がふわりと乗っている光景が何となく哀愁を帯びて浮かぶのである。親元を離れ、修行の身の厳しさを耐えて仏の道に進む雲水のまだ若い姿に一抹の淋しさと決意とが窺はれて、遠く鳴るお寺の鐘の音迄きこえてくる様な一幅の絵である。

……題詠「山」……

壺焼を待てば夕富士海の上

神奈川 諸星 泰子

多分江ノ島かしらと思う句で何か日常の小さな喜びをこの句から感ずる。採れたばかりのさざえの壺焼、ふつつつと壺焼が運ばれてくる迄、少々の間待たされる。ふと見ると海の上にはばかりと富士山がまだ消えずに姿良く浮かんでいた。やがて運ばれてくる壺焼の少し焦げた匂い迄届く様で、誠に素敵なお句である。

秀作

手袋は外せぬ朝の散歩かな 大分 木村 和人
 海鳴りと潮風浸みる懸大根 山形 佐藤 豊光
 手の平に赤飯を受く春祭 群馬 河村 葉子
 鎌倉の大きな春につつまる 東京 藤岡 定子
 寒紅をさして仕上げの帯たたく 茨城 田中 ゆず
 源氏名の螢とび交ふ沈下橋 高知 中越 真郷
 春近し郵便受けに入選句 秋田 金 道博
 ひとごとと思ひし雪に転びけり 群馬 塩野 恒子
 良き医師に命預けて寒明け 長崎 多々良 榮子
 明るさが山へ広がりに土筆萌ゆ 東京 横田 宏子
 一列に歩く歩板や水芭蕉 大分 小松 芳子
 ふるさとの雪をのせ来る列車かな 東京 座間 英幸
 江ノ電の軋む鎌倉あたたかし 千葉 岩田 勝
 鎌倉と言えば虚子かな余寒かな 埼玉 関根 瞬泡
 彼岸花どこへ消えたか影もなし 東京 佐々木 誠
 江ノ電が傾くほどに春の海 群馬 岩崎 昌子
 紅梅の眩くほどにほころびぬ 東京 若林アヤ子
 下の句の余韻を連れて飛ぶ歌留多 北海道 櫻井 伸良
 鎌倉や鳶の輪高く雛の忌 東京 小川美津子
 深雪晴田んぼの中の一軒家 秋田 石川 明
 ……題詠「山」……

天上へ花駆け上る吉野山 千葉 昆舍利愛子
 万蕾の花の息吹きや源氏山 神奈川 鈴木智香子
 一山の音を絶ちたる崖水柱 千葉 徳島 東洋
 うぐひすや山懐に虚子の墓所 東京 草野 准子
 海苔搔を生業として山知らず 京都 室 達朗

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

山下 清 鎌倉の大花火	赤繁 忠弘	目覚ましの鳴る前に起き松手入れ	伊藤恵美子	米空 母泊る港も春霞	大石 金雄
退院の母に花満つ朝かな	秋山 博明	今在るは女流の先師立子の忌	伊藤可代子	春の雪静御前の舞ふやうに	大川 千草
海鳴りの漂つてゐる波の花	阿久津勝利	春風や鳥の工事の槌の音	伊藤 秀月	白鳥へ静かに迫る北帰行	大河原紀子
疲れたる夫の顔見て蜆汁	阿久津利江	切り通し抜け薫風の広野かな	伊藤 秀月	一湾を走る客船春近し	大島みよし
朱印待つ上がり框の置き火鉢	浅井 敏子	今よりも短い未来盆の月	伊藤 竹代	そこここに暮のはためく梅の茶屋	大島みよし
褒められし耳も難聴夕涼し	朝川 晴也	明易し宿へ通ひの賄婦	伊藤 巴江	娘と住める安らぎありて春の月	大城 栄子
微笑みし飛鳥大仏冬ぬくし	渥美 英雄	名将の剣投ぜし春の風	伊藤 英夫	人を恋ふ梅咲くを知る夜風かな	大沼二三子
北条の栄華の庭に野火奔る	阿部眞佐朗	埋火や写経にのこる母の文字	井上由美子	谷風と水のささやき花山葵	岡 白雲
白梅や未来を託す新元号	雨宮 玲子	片方の足袋のありしは部屋の間	井上 良一	鎌倉へ青春切符夏の陣	小柏 久男
鶺鴒高音いざ鎌倉へ満を持す	新井よしを	亀鳴くや橋の真中の県境	今井多津子	鎌倉は吾妻鏡と紫陽花と	尾形 哲雄
大寒やバケツに捉ふ月一つ	有馬 紫秋	初雪の風に飛ばされ池に消ゆ	今井 哲也	餅入れて家族まあるく鍋のしめ	岡田 春人
春愁や過ぎし時間にふと気づき	池田 純子	大仏や春の愁ひの中に座し	今田 範子	江ノ電やのどかな波の由比ヶ浜	岡部いさむ
大夕焼鎌倉五山一色に	池田 功	鶯や浅き眠りの中に聞く	今田 範子	寿福寺の桂敷踏む虚子忌日	岡部いさむ
栗鼠跳ねし大地のあたり春めけり	石井 俊子	新時代来る立春の波の音	岩崎 絵美	単線の小さな駅舎春の雪	岡本ひろえ
一病と生きる歩幅や凍ゆるむ	石井 俊子	早春や鎌倉野菜色きわむ	岩澤 洋子	糶焼くは生まれし町の夕陽の香	沖野 晶子
鎌倉の谷渡りゆく夏の蝶	石川 寿樹	讃岐路の伊予見峠に春の虹	岩田 君美	刺繍糸買いし一色春隣	沖野 晶子
大仏の眠りをさます花火かな	石田 勝弘	卯浪寄す歴史にのこる古戦場	岩野 記代	年号の変る予告や春田打	小野トメヨ
小津調の映画に偲ぶ古都の秋	石田 康明	雲水の一列にゆく春時雨	岩本 弘	畑打つや一声高く鳶の笛	垣内 重行
新しきいのち見せむと野火走る	石橋 政和	葉桜となりて母校の表門	植松 秀子	江ノ電や海荒れてみて卯波立つ	加藤 梅夫
身延山方十三里の花浄土	市川 東子	鍋底へパスタ崩るる二月尽	内田 創太	シエフの買ふ鎌倉野菜春の市	加藤 重松
昨日見て今日見て坂の寒椿	伊藤恵美子	三月や晴れて傘寿の誕生日	及川 信二	実朝の詠みし海にも夏来たる	加藤 重松

夕焼けや見送る母の小さくなり	金山たま子	春風や虚子の一〇〇句を誦誦す	三枝 青雲	国旗上げ大川広し夏に入る	関 さくら
虚子立子椿とつづく春の海	金子加津久	存へて君の合格ありて春	酒井 正	手袋を脱ぎたる手話のさやうなら	関 美奈子
遠ざかるものに昭和と金魚売り	金子 照榮	一行を待たせてすする心太	坂井 正巳	古都の春いざなう風の切り通し	関口ひろ子
着ぶくれや通夜の足元おぼつかず	叶多加代子	盆栽の十四五鉢に蝶一羽	崎上 守	鎌倉の星野立子の帰り花	曾根新五郎
人力車過ぐる小路や藪椿	菊地 水酔	由比ヶ浜の夕日に帰燕見えかくれ	佐藤 無風	鎌倉の花ひとひらは虚子の遺書	曾根新五郎
通夜の客去りぬ時雨の音残し	川崎 和啓	江ノ電の車庫はがら空き燕の巢	佐藤 無風	鎌倉は恵方俳句の聖地かな	曾根新五郎
ほととぎす一声残し谷越ゆる	神田 進	夕焼を背中にあびる由比ヶ浜	佐藤 無風	大寒のいざ鎌倉の投句箱	曾根新五郎
寿福寺の虚子が墓前の花椿	北島 宏吉	春泥に置いてけぼりの三輪車	佐藤てい子	九十の夫冬耕を生き甲斐に	園田 和子
立子忌の風緩やかに身八口	工藤 芳枝	とめどなき軒の雫や春障子	佐藤 正博	左手で立子が描きし雛優し	高橋葉菜絵
秋灯や影も全き伎芸天	久保 厚夫	春立つや決意固めし尊厳死	佐藤貴白草	子の家族泊めるため干す蒲団かな	高橋 裕子
天高し虚子の教えは鎌倉に	久保田敏子	紫陽花のかど曲がり来る電車かな	座間 英幸	砂浜に日の出待つ間の大焚火	高橋 博
餅花のちらりと見ゆる楽屋口	蔵 堯子	奥入瀬の芽吹きを誘う瀬音かな	座間 英幸	シスターの朝の祈りや梅の花	高畑 半身
軍港の真つただ中を南風吹く	栗原 泰子	青空に牛がもの言ふ阿蘇の初夏	志鶴 富生	青墨のふんはり滲む春隣	田上 喜和
家事手抜き今日は勤労感謝の日	郡司 紀子	文豪の旧居涼しき谷に在り	泉 耿介	山の子の乗る江ノ電や夏休み	田口 穂心
語り継ぐことも供養や原爆忌	源通 清信	あぢさゐの毬は大きな雫かな	芝田 太	大寒や赤城風も加はりて	竹内 友子
幾度の春を映すや滑川	小嶋 恵美	棚経の短し僧の雪駄去る	白井美沙子	鎌倉の背山にひびく初音かな	竹中 友弥
釜始むすび 柳の床柱	小塚 信江	大マスクはずして教師説教す	白岩 賢次	故郷の一夜泊りの茸狩	田島 貞子
人力車鎌倉宮に風薫る	小林 一義	江ノ電の過りしたびに軒風鈴	城山 憲三	根付には鎌倉彫や春小袖	田代 東代
ていねいに積もるや古都に春の雪	小牟田靖子	麗かや立子椿の文字似たり	神通美美代	遠き世のくずれし城に梅雨の月	田中 純代
立子忌や三色あられ煎りあがる	小山しづ子	波音の鎌倉泊り明易し	杉山 峻一	初蝶のなかなか去らぬ鏡石	田中テル子
田の神に餅を供へて春田打つ	今野 忠雄	「平成」に老いて感謝の年始酒	杉山 公宏	鎌倉の海燃え上がる大花火	谷中 治雄
家に居て海見る如し新若布	齋藤 のぶ	日蓮の説法塚や鴟猛る	鈴木三光子	菜の花や海を背にして薩摩富士	種元弘一郎
初糶や大間のまぐる三億円	三枝 青雲	空也忌や空也もなかを買ふ銀座	鈴木智香子	薪能陰翳曳きぬ能衣裳	田野 利明

行く雁に手を合はせたくなりにけり	玉川 憲子	鼻欠けの男雛の顔の凜として	西浦加賀子	立子の忌遺愛の机椅子を撫づ	原 和三
山国の虚子の黄蝶に会ひに行く	知念 哲夫	又一つ 齡重ねし雛納む	西尾 青雨	流れ行く川にとどまる春の月	馬場 弘子
肝抜かれ吊り鮫鱈に付く値札	千葉 三郎	薄氷の池一枚となりにけり	西久保キノ	母の日や母ある限り吾が故郷	人見 正
紅梅の仄と映りし谷戸の池	辻 みを	谷戸風の抜くる茶房や吊し雛	西田 啓子	風呂敷のゆるき結び目花ぐもり	日比野さき枝
昏がりに政子の墓やさへづれり	露木 伸作	風鈴の音色選びに迷ひをり	西村 斗潮	鎌倉や苔むす岩の切通	姫野 富雄
早春の笑ひの渦や寄席に沸く	寺田ともこ	百歳の希は夢か竜の玉	西本 文子	山峡のただ一軒の葉喰	平岡 啓助
椿寿忌を心して鎌倉を訪ふ	藤堂くにを	木曾三河流れ悠々春かすみ	西本 文子	坂町に新酒の香る深廂	平野 孝純
三井の鐘長き余韻に春惜しむ	堂本 美舟	老いてなほ一耕人でありにけり	西山 勝男	丹頂のダンス盛会春の雪	平林 佳治
夕朧浦曲に傾ぐ磯馴松	戸松つたへ	晩節を土と向き合ふ露涼し	西山 勝男	災の字や平成がゆく除夜の鐘	蛭田 啓子
白牡丹見入りし虚子が眩けば	内藤 正人	何事もなかつたやうに野分あと	二藤 誠祥	海苔簀にひたひた迫る夕日かな	蛭田 啓子
春風や母よりえくぼ受け継ぎて	中川すなを	鎌倉の路地迷ひけり梅の花	野島 巧休	兼六園 職人技の冬構	深川 善行
貴婦人の名前が揃う薔薇の園	長崎 円喜	ベランダで作りし冬至南瓜かな	野村 由	万緑の真下を上りゆくりフト	福田 隆
山ひとつ越えて友あり春隣	中島 啓介	虚子の二字彫られし墓石梅の花	芳賀 松里	鎌倉は海山のあり余寒あり	福田 和香
紅梅の濃き一もとや野立傘	永島 文江	鎌倉の余寒に虚子を偲びをり	橋本世紀男	平成の終る年なり初御空	藤井 黎子
紅梅の苔黒々と今朝の雨	中島 光江	桜貝見つけてうれし由比ヶ浜	橋本 久子	笹鳴きとそと椿師に教へられ	藤田 克弘
生しらすテラスの先に烏帽子岩	永田 証真	時つげる障子明りの白さかな	蓮見うた子	白梅や文士の眠る札所寺	藤沼 花代
風花や義経恋ふる舞のごと	中西 定子	いつの間に坂を登りし梅見かな	蓮見うた子	鎌倉の余寒貼りつく虚子の墓	富士原康子
書初金の金釘流を憚らず	中根 武郎	沈みゆく日のためらひや春近し	長谷川礼而	鳥交る谷戸の深きを移りつつ	富士原康子
どの家も干菜を軒に余呉の村	中野 達也	無口にて不仲でもなし蜜柑剥く	羽立 和子	ぶらりゆく虚子の鎌倉梅日和	古郡 孝之
軒先を行くも江ノ電駅うらら	永松 市夫	水打つて托鉢僧を迎へをり	花形きよみ	鎌倉に虚子庵椿遙けしや	堀田和歌子
手触りに露の臺あり草の中	中村 孝行	実朝の海や大きな春の月	英 龍子	賑やかに人来て去りぬ冬牡丹	本堂 良衣
花おぼろ川にうつろふ里あかり	中山あや子	大都会悲喜交な雪の朝	羽吹 ハル	穂の芽や例へばあをき炎とも	前 九疑
木下闇矢倉のなかに虚子の墓	中山 壹路	すは鎌倉武家の館の青嵐	濱本 尚子	切通し抜けければ光る春の海	前崎とし江

散ると言ふこと知らざりし玉椿	増田 笑子	雉の声今は恋しやニュー団地	森 安千代	大仏の在す山蔭初声かな	岩澤 洋子
口口に立子を語る雛の宴	柗野 雅憲	移り住む市民農園春耕す	安田 清子	裏山の読経のやうな蟬しぐれ	岩野 記代
わが庭に摘みし桜茶結納す	松浦美智子	枯蓮の雨粒の音円覚寺	保田 昌男	筑波山背にして蓮根掘りにけり	上原 國男
春暁や湯の香ただよふ始発駅	松尾 雄司	飯免の孫の微笑み辛夷咲く	安福 隆司	薫風を掴みし鶯の山河かな	江口 來童
ほろ苦き恋にも似たり露の臺	松岡 孝子	針供養豊を縫ひて二十年	柳井 惠康	校庭の片隅に立つ案山子かな	榎戸 源茂
凍解けて大地に息吹蘇る	松岡 孝子	ポーっとするも時に必要日向ほこ	矢内とき子	里山の眩しい白や蕎麦の花	榎本 節子
沈丁花甘く切なく懐かしき	青 闕 魚	桜咲く文学館への赤き橋	山口千代子	一山を裏返すかに青嵐	大川 千草
赤い橋渡り佃の遊び船	松木 溪子	吉野山明るく灯す山桜	山田 十朗	富士山に向かひて泳ぐ相模湾	太田 邦子
泰山木昨日の白とけふの白	松木 溪子	傾きて走る江ノ電春の海	山田 実	鎌倉や虚子と大仏春の山	大塚 露風
風のごと賀客の去りし家の佗	馬渡 清蔵	武士の影ちらほらと白椿	山田 実	手庇の夕焼雲に山鴉	大西 隆栄
総門の奥百間にある余寒	三島 守相	虚子の忌や鎌倉道の春の霜	山本 啓介	一山を山ふところにみどり燃ゆ	岡 白雲
虚子眠る寿福寺の丘春の風	溝呂木勅忠	夏きざす海一望のホテルの灯	吉井美代子	日脚伸ぶ遠山に日の残りけり	岡田 敏彦
春の海見えて江ノ電加速せり	三橋 順子	虚子の忌に黄蝶を見しはまぼろしか	吉田かずや	山越ゆる僧の草鞋や雪催	岡野 弘子
汽水湖や白玫瑰のひとつとこ	宮坪 勝美	初茜実朝の海なぎわたる	若林アヤ子	山の音やがて野の音春の来る	岡野未由子
動き出しさうな江ノ電春一番	村井 光子	善光寺平を走る片時雨	和田 郁江	笛の音や幾山越えて義経忌	尾崎眞里子
青空に太陽ひとつ雪解急	村上 秀吾	明月院四葩の花に浸りけり	渡辺 佳子	風そよと尾根にやさしき山桜	小野寺信雄
石狩の大地貫く川へ鮭	村田 浩	……………題詠「山」……………		八合目スキーで下りた岩木山	柏原 和夫
春立つや秩父に兜太句碑十二	村田 寛文	山の湯に極楽気分余寒の日	相沢正志斎	山伏の法螺貝ひびく山開き	神根 信
臘梅や窯元までの登り坂	村橋 克雄	上京す花に膨らむ上野山	四十物敦子	「山会」に文豪数多天高し	上村扶佐子
寒椿仰ぎて登る寺詣で	室 千寿子	悠久の大和三山みな朧	秋山 観水	山見えて遠き鎮守の祭笛	神田 進
大仏の衣にうすき春の雪	持田 市朗	遠山の空に浮びて残る雪	飯塚 柚花	月山の峰より明くる初御空	工藤 稲邨
こちち良き風とたはむれ初蝶来	百瀬 信之	三州や山遠ざかる冬日和	伊藤 満	山焼けば姨捨に風立ちにけり	黒崎 舞句
ふらここや日の沈みゆく相模湾	森 民子	五山の灯遠くにのぞむ春の宵	今井 禮子	我が里は山裾までも豊の秋	源通 清信

春待つや五峰の那須に住み馴れて	紺野 朋子	苦も楽もたつた一文字山笑ふ	中西 定子	一山の城址丸ごと桜かな	八木澤 賞
登り来て月山険し紅葉晴	今野 吉見	鎌倉や海と山とに夏来たる	南里 要	山吹の土手一面を鮮やかに	箭内 滝根
如月の山が呑み込む落暉かな	斉藤すみれ	山の子は山見て育つ雲の峰	西本 文子	雪晴れて蔵王連山輝けり	柳田 美鈴
穴釣や山湖彩るテント張り	櫻井 早苗	末黒野や北の連山まだ白き	野中 康弘	山の巖一気に消して秋日落つ	藪田 拓司
江ノ電の過ぎて富士山初景色	笹野 青陽	山桜活けて人待つ無人駅	橋本 久子	からからと上るゴンドラ山笑ふ	山本キヨ子
若葉山生まれし風に鳶の舞ふ	篠 信子	古里の山に向き会い土筆とり	馬場八代子	三輪山に人の集まる初詣	芳林 淳子
大太鼓ドンと一発山を焼く	鈴木 武	海匂ふ鎌倉山の落椿	浜田はるみ	奥深き秩父山地や梅二月	渡邊 安雄
大空に向けて法螺貝山開き	鈴木 経彦	ユングフラウ登山電車の雪煙	濱名 博光		
月山の水まんまんと青田かな	鈴木 周子	遠山に立春の虹色を注す	浜西 修		
鎌倉に五山の薨青葉木菟	角 達朗	晴れ渡る鎌倉五山風光る	原 和三		
幾折れの山湖へ深む霧襖	関 雅己	口中に広がる山野ふきの臺	房前和加子		
山門の先は結界地虫出づ	曾根新五郎	山壁に風の棲みつく根深汁	藤沼 公子		
谷戸もまたもののふの道山桜	高橋きよ子	だんだんに棚田現はる霧の山	堀 昭治		
檜山を読み耽りたる夜長かな	高橋みつる	早春の光を放つ富士の山	松井 洋子		
鳥海山の頂はるか帰る鳥	田口 穂心	この山を境に雨は雪となり	松浦知恵子		
大花火筈を返す四方の山	橘 光江	山の端にゆらり顔出すいかのぼり	松尾 昭雅		
建長寺登る山辺の濃紫陽花	田中 阿以	山が見え海も見ゆるや籐寝椅子	松田 紀子		
赤富士は俺等が宝と甲斐の人	谷中 治雄	故郷の山河を称え風の盆	丸山 与作		
憂きことは笑ひ飛ばせと山笑ふ	出島 達子	時鳥隠し湯までの山幾重	見高美代子		
探梅や虚子が笑へば山動く	内藤 正人	厳寒や峨々たる山の相寄らず	宮沢 一郎		
滝つぼも凍てて一山しんと暮れ	永島 文江	おおいなる山の彼方に冴ゆる月	宮地 昭子		
上皇の越えし峠路笹子鳴く	中筋のぶ子	虚子の忌や見渡すかぎり山ばかり	日黒 輝美		
ふるさとの山に人声路の臺	永田 満男	ふるさとは筑波おろしや墓参り	森近利宇子		

堀本 裕樹 選

特選

春眠の髓を詠まんとまた眠る 宮城 齋藤 伸光

「春眠」を探究するために、眠りから覚めてふたたび眼を開じたのである。言ってみれば、春眠を吟行するようなものだろう。「髓」とは奥義という意味があるから、春眠を究めようとしているのだ。何のために？ 春眠の秀句を詠むためである。長閑に見えるが、凄まじい執念を感じる。

潜望鏡のやうにぜんまい地中より 東京 佐藤 風

潜水艦が海中に潜っているとき、潜望鏡を海面上に出して辺りを偵察する。その様子を地中から生え出てきたぜんまいの姿に重ねて見たのである。この意外な比喩が面白く、ぜんまいも頭を出して周りをさぐっているように思える。無機質な潜望鏡と有機質なぜんまいとの思わぬ類似性。

……題詠「山」……

穴を出で山また山に見入る蛇 東京 太田 邦子

土中で冬眠していた蛇が、久しぶりに外に這い出てきて山景を堪能している趣がある。山深くに棲む蛇が、山頂辺りでその鎌首をもたげて折り重なる山々を見つめているのだ。ドイツ・ロマン派の画家・フリードリヒが描いた「雲海の上の旅人」の構図と重なるような蛇の遠見である。

秀作

文鳥のやうな子の靴風光る 神奈川 浅木 ノエ
 山茶花の打ち合うごとく散りにけり 石川 飯田 順子
 若鮎の飛沫を上げて焼かれけり 埼玉 関根 瞬泡
 亡き人の時計の音や春の雪 山形 富樫 桂子
 剪定の葡萄の樹液光る朝 山梨 小松 和美
 秋風や豚舎抜け出す豚の声 神奈川 岩崎 幸邦
 初蝶の過ぎて樹間の見えて来ぬ 東京 大石 坦
 やぶ椿藪突きぬけて咲きぬたり 兵庫 岸本眞智子
 南海の底は霊廟終戦日 茨城 小林寿恵王
 秋の蝶止まらんとしてまた吹かれ 神奈川 藤枝 信雄
 沈丁の香りに形ある如し 岡山 池田 純子
 ぬんめりと烏賊のわたぬく夕おぼろ 埼玉 伊藤 柳香
 長男の来る日長女も来てうらら 東京 福島テツ子
 蝶凍てて化石のごとく石に浸む 兵庫 草壁 昂
 戦なき此の春眠を貪りぬ 神奈川 大沼 卓郎
 そこかしこ屍のやうな蔭の雪 群馬 田村 華生
 封書裂く力や雁は地に眠り 兵庫 川崎 和啓
 みちのくの桜の枝の水柱かな 山形 富樫 正義
 妹の亡き事に慣れ春愁 千葉 実沢 愛子
 啓蟄の庭に群がる雀かな 茨城 佐藤 敏文
 ……題詠「山」……

登山靴ひきずり来たる通夜の客 東京 若林 正人
 新緑に鎌倉五山吞まれたる 神奈川 松永 朔風
 裏山にはほふばかりの囀に 栃木 関口 ミツ
 冬晴れや山に映りし山の影 静岡 小本 厚代
 銀嶺を仰ぎ嘶く耕馬かな 愛知 城山 憲三

◆佳作◆ 掲載は氏名五十音順です。

西日さす踏台のある厨かな	四十物文代	流行にうとい二人にはやり風邪	植木 修子	虚子立子椿とつづく春の海	金子加津久
白菜を真二つに割る久女の忌	赤尾 和子	船笛の尾を引いてゐる去年今年	植木 英雄	始発ベル押す駅員の息白し	神根 信
春耕や筑波の嶺の照りかげり	荒尾寿美江	まず記す息子の来る日初暦	牛久保悦子	兄逝きて荒びし畑や菜種梅雨	上村富美子
地球儀は大方海や入学す	池田 純子	薄氷に記憶のごときひかりかな	内田 創太	父の日や机に遺る父の文	川崎 紳一
鎌倉の谷渡りゆく夏の蝶	石川 寿樹	花桐や馬頭観音御座す径	大垣鹿乃子	漱石の参禅の寺梅早し	川崎 穹子
東風吹かば岬の馬も立眠り	石澤 正	底紅の底に昨夜の雨のつぶ	大河原倫子	九十路おれもでんでんむしとなり	川島 孝一
鎌倉に昔ありけり春の月	石関 武之	先生も美しうなり卒業式	大島 記子	すかんぼを食ぶ童らの大笑い	川邊多美江
胸に抱く犬の甘噛み夕桜	石塚 信子	紫陽花のいろ移りゆく夜の庭	大出 豊子	うぐひすの声追ひ掛けて夫の墓	河村 葉子
島になほ島守る一戸野水仙	石塚 信子	きさらぎの月光シヨールムの新車	大平さゆり	春雨や小町通りを僧急ぐ	神田 進
まだ帰還許されぬ町燕来る	石原 良彦	観察員掬ふ両手の蝌蚪の国	岡田 有峰	大空の風を乗りつぎ行く木の葉	木下 藤香
噓して真空地帯生まれたり	伊藤 恵水	境内を走る落葉も神のもの	岡田 邦男	十一月の空の芯より海の音	木原 登
子に背ナを押されて投句風光る	稲田 稔子	風花や向かひの猫も外眺め	奥中 和子	取り上げし春あかつきの命かな	日下出水美
誰もぬぬ墓に漂ふ秋のこゑ	稲津 順子	眠る児を夢ごと移す夏座布団	奥村 利夫	囀や朝日は海を離れたり	楠 暢太
冬日向形見の着物ひろげみる	井上 昌子	鶯の声する庭の閑けさよ	小澤さき子	夕涼や竹林とほる風の音	久保田敏子
熱の子にガラス戸越しの雪達磨	入江 武子	里神楽大蛇の尾まで怒るごと	小田原ちよ	雪の夜さざなみのごと鈴鳴りぬ	栗坪 和子
無人精米機のこぼれ米食む寒雀	岩城眞理子	汗ふきて山門見仰ぐ老ふたり	小野守信雄	早蕨やまたぎの帰る丸太橋	黒崎 舞句
ひかり差す参禅の門漱石忌	岩崎 絵美	清明の初出勤やチャボの声	花野紫雲英	春浅し音ひとつなき瀬戸物屋	高坂 みさ
日付にも亡き妻らしさ古梅酒	岩崎 幸邦	菩薩像寒暮の光あてて買ふ	梶原 安之	生きのこり仮設二間の大晦日	河野 重雄
朝霜の屋根に夫あり声かけず	岩崎 武志	わが終の旅と思ふや山滴る	門井 美豫	二つ三つ落ちて椿の庭らしく	小柴 智子
初島や干綱ゆらす猫の恋	岩瀬 静代	手の平に載せて見せ合ふ桜貝	加藤 三朗	めくり癖つきし楽譜や藤の昼	小林 恭子
しんしんと耳鳴りしんと春の雪	岩瀨 純子	告白を急がぬ夜や春灯	加藤 申女	雉笛を吹いて始まる紙芝居	小林 生子

下萌える緩む楔を石で打ち	小林 友春	鱒干して葉山消防団詰所	塩谷あい子	啓蟄や鋏柄の楔打ち直す	祖田 敏至
金縷梅や縁切寺の日だまりに	小林 眞彦	総身にまとふ風春來たりけり	重富美津恵	父拾ふ青水無月の骨拾ふ	曾根新五郎
淡雪や菓子焼き上がる間の会話	小松 和美	春立ちぬダニーボーイを聞く夕べ	重光 寛子	正月の靈安室の時計かな	曾根新五郎
有り余る知識におぼれ餅こがす	小松 芳子	霧襖破りて下る男坂	篠 信子	夢の中までも八月十五日	曾根新五郎
雀らの光つえばみ春立つ日	小山 一彦	江ノ島や夏の怒濤の光満つ	篠 信子	凍滝の力のこもる白さかな	曾根新五郎
立子忌や三色あられ煎りあがる	小山しづ子	苔青し炭焼小屋のありし跡	芝田 太	七色の遊具錆びをり草の花	染谷 紀子
田の神に餅を供へて春田打つ	今野 忠雄	体温の残りしシート沈丁花	嶋田 奈緒	園長の打たれ上手や年の豆	高久 敏子
駒ヶ岳また消されたり雪しまき	今野 文夫	山里の猪垣開けて納骨す	島津紀代子	着岸のフェリー春風纏ひけり	高倉 早苗
雛の日男所帯の手鞠ずし	権納みのる	鳩の餌の無人販売あたたかし	清水ゆみ子	凍星を仰ぎて今朝の一步かな	高崎 雅明
満願の喜び分かつ福寿草	酒井 正	父母ありて我が喜寿の春立ちにけり	城宝寿美礼	ふらごを漕げばささやき返す風	高田みづ杞
ブロッコリー茹でる鍋底春立てり	堺 美典	ミシン踏む足に金木犀の風	白井美沙子	祝われて残されゆくや生身魂	高梨 裕
こめかみへ藤の色香の染みにけり	村上瑠璃甫	雪降りて祖霊の如き枯木かな	叶矢龍一郎	おもむろに風を仰ぎて鶴発てり	高橋 佳代
残桜や蒼き闇ある切通し	坂本 徹	「君たちはどう生きるか」を伏せ昼寝	鈴木 計廣	蚕豆むく音ぼんぼんと母子かな	高原 晴子
摘草や母は少女へ駆け戻る	相良 研二	巫女のさす白番傘や花の雨	鈴木智香子	春風に白馬嘶く穂高かな	瀧川實樹男
幾万の泣女を連れて大寒波	佐藤 風	段葛かけぬけて止む春の雪	鈴木智香子	掃除機をかけて秋の蚊出て来る	竹内 恵子
建国の日の氏神の古幟	佐藤 豊光	梅東風や古木のねじれゆるやかに	鈴木美恵子	如月の心に届く波の音	田代 東代
大根抜く大地の息吹き感じつつ	佐野 月子	深閑と詩集の余白雨水かな	鈴木 周子	良き医師に命預けて寒明ける	多々良榮子
米粒の芯まで甘し今年米	佐野 月子	巡り来し十三仏や春夕焼	鈴木 深雪	寝たふりの上手な子猫貰ひけり	館野 茂子
ふるさとの雪をのせ来る列車かな	座間 英幸	梅見する人の手にある写真かな	関 雅己	冬日向牧の黒牛寄り合へる	田中 ゆず
底冷や身が一本の線となる	澤井 国造	ブラインド透け冬蝶の舞ふ影か	関 美奈子	蜜柑剝く寂しいときはきれぎれに	田中 茂三
由比ヶ浜古き寺より水着の娘	椎原美佐子	みづうみの深きを湛へ竜の玉	関根 瞬泡	新緑や一本徑に野風立つ	田中 純代
相模湾うねり眩しき麦の秋	塩川 隆三	文庫本閉じ大寒のうつつし世へ	関矢 好枝	きらきらと雀の交る昼の窓	田中テル子
春暁の月に舞ふ鳶龍太の忌	塩谷あい子	紅椿雫のやうなイヤリング	瀬谷 節子	敬老日園児の瞳輝きて	田中リツ子

冴返る版画のやうな明けの影 行く雁に手を合はせたくなりにけり 山国の虚子の黄蝶に会ひに行く 村消えて川音のみや座禅草 古事記三巻引揚リユックに敗戦日 土砂降りの中祈りけり沖繩忌 大仏へ春の潮風とどきけり うららかや白寿に紅の死に化粧 流水の音におびえる吾子を抱き 引揚げの荷にくるまれし古雛 鎌倉に一陣の風ほととぎす 自転車の僧衣ひらひら畦青む 陽炎や大仏立つが如く見え 春風や母よりえくぼ受け継ぎて 笹鳴きやうれしき便り二通きて 菜の花のベンチにはるか紀伊水道 流鏑馬の青風射抜く矢羽根かな 吊革の 一糸乱れぬ目借時 風花や義経恋ふる舞のごと かたかごや地藏菩薩の足下に 右折車の吸い込まれゆく春の闇 蛇のごと里をバス来る二月かな 永き日を持って余す程生きてをり	田辺 秋花 玉川 憲子 知念 哲夫 千原 道子 千原 道子 塚本 治彦 辻 三千代 出口 裕興 手柴由美子 寺川 芙由 内藤 正人 長岡 和恵 中沖 稔 中川すなを 中筋のぶ子 中筋のぶ子 中田 浩作 中田 良一 中西 定子 中西 純子 中村 愛 中村 孝行 中村代詩子	受験生村の神樹に触れて発つ 泣いてゐる子につくづくし摘んでやり 屈みし母そこにありしよ露の臺 椿の木見上ぐるように落椿 春の海思い出したる母の膝 国後のありありみゆる寒日和 撞けばまた鐘より蜘蛛のさがりくる すいとんの香りゆたかな建国日 鎌倉の奥うつくしき枝垂梅 老いてなほ一耕人でありにけり 老骨に残る反骨冬剪定 北風強し高さ偲ぶる君の肩 高原の音楽会や星涼し 停まるつど受験子詰まり今朝のバス 一村の光となりて銀杏散る 江ノ電とともに揺れをり初鱈 流鏑馬の射手のまなじり新樹光 ロボットのまなこ五月 ロボットがロボット操作聖五月 花冷や廃棄カルテの焼却炉 鈴蘭の届けられたる保健室 教え子はもう還暦か木瓜の花 トルソーのごとく剪られて大冬木 風呂敷のゆるき結び目花ぐもり	中本きみよ 南波 ムツ 仁木ひさ代 西島 晴治 西館 紀子 西塚 好幸 西村 愛美 西村 礼子 西山 敦 西山 勝男 二藤 覺 額田 昌安 能田 孝昌 野澤 衛道 能瀬 五月 萩原 成亮 萩原 成亮 花形きよみ 濱田真知子 濱田真知子 羽矢 真人 原 雅 日比野さき枝	白梅や師のゐる修羅の道を行く 墓ぬくし叱られたくて泣きたくて 春雷や書棚にさがす夢十夜 難関の特養に入る木の芽和 幻の音の重ぬる落椿 子は母の影とあそんで白日傘 落葉踏む色それぞれに音のして わが影に躓きそうな寒さかな 表札に残る母の名梅日和 マネキンの目線の先に星の恋 一筋の帯締めに有る春の音 太古より女はつよし梅一輪 春光や野道に停めし乳母車 口口に立子を語る雛の宴 遠足の子等寡黙なり爆心地 うららかや市民ホールへ人の列 春日や空地に子等の走り込む たんぽぽやジーパン叩き干す漢 新緑へ憂ひを解き歩みけり 淡雪の闇やはらかくしてをりぬ 秘仏の扉開ける村役梅二月 松支ふ杭新しき実朝忌 松蟬や昔の風の棲む遺跡	平井 萌黎 平井 萌黎 平島 照雄 平林 佳治 深澤 美子 藤村 義治 藤村 義治 藤森せつ子 淵野 栄子 古川よし秋 保坂 嘉郷 細井 恵子 堀田和歌子 保積 和人 柝野 雅憲 松浦美智子 松村 佳代 松田 紀子 松宮 一仁 松山 真弓 真鍋 貴子 三浦 貞葉 見上 都 水口喜代子
--	---	--	--	---	---

うぐひすや竹の門真青なり	溝瀆 淑	頂きし命よ呵呵と年迎ふ	山崎嘉代子	眼の青くなるまで夏の山仰ぐ	伊藤 柳香
天皇の深きまなざし菊かをる	箕輪純一郎	大仏の裏も表も春休み	山田 蹴人	裏山の読経のやうな蟬しぐれ	岩野 記代
大銀杏すだ椎もあり風涼し	箕輪 眞清	江ノ島の海蒼茫と風薫る	山田 凍崖	山笑ふひさかたぶりの草野球	岩本 弘
山鳩に窓のぞかれて春炬燵	宮山 輝文	君と住む一間の窓のシクラメン	山中 節子	木漏れ日の四温日和の山路ゆく	上須喜久治
海の風山の風ありしらす干	三輪 照子	ジャスミンのほのかに香る夏座敷	山野 節子	山火事のやうに吐き出す霞かな	魚谷さきこ
白梅忌としたき父の忌梅香る	村井みさを	白々と砂丘の町に雪降り	山本キヨ子	薫風を掴みし鳶の山河かな	江口 來童
配達員春泥残しゆきにけり	村上 玲子	花野風ハモニカ奏で挽歌とす	山脇香代子	山よりの風に扇をたたみけり	遠藤 操
日脚伸ぶ湖畔に拾ふイヤリング	村田 浩	帰省子の厨に入りてあれやこれや	行藤 郁代	富士山に向かひて泳ぐ相模湾	太田 邦子
凍滝の裏の磨崖へ水の音	村田 浩	明るさが山へ広がり土筆萌ゆ	横田 宏子	古い二人山畑崖の下萌刈り	大成 金吾
竜天に登り振り切る風向計	村田 淑子	鯛の径あり谷戸の登り窯	吉井美代子	木々枯れてそれぞれにある山の貌	大野 良子
蓬餅搗いて母の忌迎へけり	村橋 克雄	宵闇の扇ヶ谷に花浮ぶ	吉川 雋祐	武士の歩きし山に岩鏡	佐 知子
着脹れて少女に返る長電話	室 雅子	虚子の忌に黄蝶を見しはまぼろしか	吉田かずや	灯を入れて大きくなりぬ山車囃子	奥村 利夫
トンボ曳く球児の前に春の月	持田 敏朗	亡き友のケルンに触るる冷たさよ	若林 正人	山独活の匂ひ軍手に残りけり	加藤 哲
早馬の影さながらに青嵐	百田登起枝	咲きながら枯れる水仙風強し	渡辺今日子	初春や山坂越えし傘寿喜寿	金山たま子
粗彫りの子安観音木下闇	百田登起枝	幾代へし富士の水湧く秋のこゑ	渡邊 潤勝	稜線のはきはきとして二月尽	川崎 京子
探梅や猫抱きながら犬連れて	森内 勇治	薫風や捨てられてゐしハイヒール	渡辺 照子	山頭火の喉潤しし噴井かな	菊地 孝也
唐突に剥きだしの腕猫の恋	矢口 桃子	夕富士の向かう故山よ青き踏む	渡辺美智恵	小満や山師おくれってくる句会	岸上 玲子
放されて戻りし犬にゐのこづち	矢内とき子	……………題詠「山」……………		異邦人連なる富士の山開	九法 活恵
紅梅や耳を澄ませば海の音	柳尾 ミオ	築打たれ山河定まる秩父かな	朝田 黒冬	山羊の子の小さな角や春の草	蔵 堯子
猪が花道をゆく飛花落花	柳尾 ミオ	山巔に希望ありけり初日の出	池谷 硬司	山なりのナツクルボール春の空	小久保 寛
初恋の両手で掬ふ岩清水	山内 健治	川岐れ岐れて海へ山笑ふ	石塚 信子	疼痛の山を乗り越え蕨餅	小末とし子
いかなごの背筋に青き海の色	山口 あき	雲ひとつ頭に置きて山笑ふ	伊藤恵美子	菜の花や四国連山はるかなる	小松 芳子
秋時雨葉残して父逝きぬ	山口 勝	四頭の象の来たりて山笑ふ	伊藤 哲	伊豆天城もの語り生む白雨かな	小屋 幸保

鎌倉の山滴れば海うごく	崎上 守	蝮捕る棒を戸口に山の宿	長嶺奈都子	遙かより雪の大山拜しけり	森 要子
春の山この野草とは顔見知り	佐藤 紫星	春風に吾子連れゆく山仕事	成瀬 貢	越して尚夢の一山夏霞	山岸 宙旅
禅林の床の間飾る山法師	佐藤 信子	刻々と山膨らみて打つ田かな	難波美枝子	ひとりにも心疲れや山桜	山崎 妙子
霊山を揺がす法螺や鬼やらひ	三反畑 弘	山頂におむすび程の雪のこる	西久保キノ	青風ナイロンザイル袈裟懸けに	山田 凍崖
教員の卵集へる春の山	泉 耿介	目覚めたる海底火山夏の恋	西村 愛美	連山を緞帳となす寒夕焼	横田 昭子
石磴の山蟻ふつと空仰ぐ	清水 初香	白雪の伊吹山へ御慶申しけり	西本 文子	遠山の電力風車秋澄めり	吉岡 亀一
幾山河越えたる父母の茄子の馬	志村 美好	とつぷりと海暮れ花の山もまた	西山 敦	湖鎮め山を鎮めてほととぎす	若林アヤ子
稜線に並ぶ鉄塔寒夕焼	白井美沙子	しろがねの鳥海山や春の朝	二藤 誠祥	揚雲雀虚子も仰ぎし浅間山	渡辺 一甫
山一つ越えくる人を待ちにけり	進藤 鳥人	砂山の崩れて夏の行きにけり	能田 孝昌		
大仏の後ろの山もしぐれけり	鈴木三光子	右府の忌や五山あまねく木の芽風	橋本世紀男		
山肌に貝の化石や青葉木菟	鈴木 武	お腹なでもうすぐですと春の山	林 美恵子		
鎌倉の山より海へ春立てり	鈴木智香子	天上へ花駆け上る吉野山	毘舍利愛子		
焰飛ぶ山火梵字の阿のごとく	鈴木美穂子	遠き日のあの山々よ日向ぼこ	平岡 啓助		
再会の話の山に月あかり	高田 貞子	山人の蝶と分け入る獣道	藤田ミチ子		
一川のひびきに開く山桜	高野 知作	山壁に風の棲みつく根深汁	藤沼 公子		
春の山切り株のごと蜂巣箱	高畑 半身	緑風の丘駆けのぼる男の子らよ	藤村 義治		
耕して拾ひ続けし石の山	武市 宣子	故郷の土石の山や春の月	船越 光政		
山菜莢やマンモス校の昼休み	竹田しのぶ	映画館出て皆遠目秋の山	松浦美智子		
山笑ふ搾乳を待つ牛の列	竹本 孝	目白来る大きな窓の山のカフェ	松本 信子		
古城めく山のホテルの茸汁	田代 東代	男らの再起を図る夏の山	松山 真弓		
山越えし父の寢息や梅真白	津田 京子	時鳥隠し湯までの山幾重	見高美代子		
上皇の越えし峠路笹子鳴く	中筋のぶ子	おにぎりのてつぺん光る春の山	宮澤 和子		
伊吹より吹く風に和し菜摘歌	中野 達也	山伏の歩の緩みたる初音かな	武藤 洋一		

NHK学園生涯学習フェスティバル
鎌倉市俳句大会

入選作品集

令和元年五月十七日発行

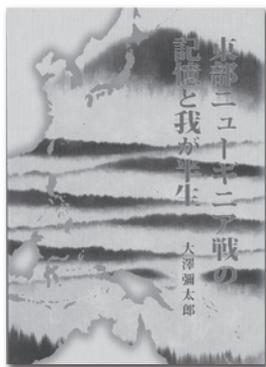
編集発行
NHK学園

〒一八六一八〇〇一
東京都国立市富士見台一三六―二
電話 〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷
明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習リポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

*相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お伺いします。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃っていないなくても大丈夫! まずはご相談ください。出版アドバイザーがていねいにご説明します。

お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

NHK学園 鎌倉市俳句大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「鎌倉市俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500 円

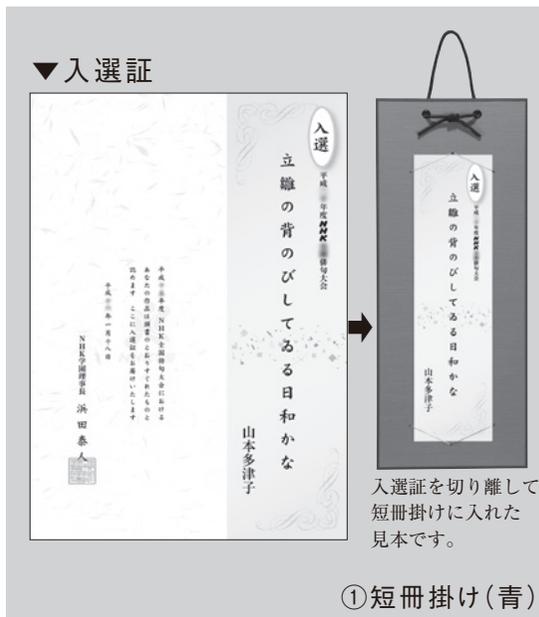
- * A4判 (297×80 ミリ) でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

《専用額》

- ①短冊掛け (青)
材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,500 円 (税・送料込)
- ②額 (クラシックゴールド)
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,500 円 (税・送料込)

《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
1つ 13,000 円 (税・送料込)
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。



キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 鎌倉市俳句大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 -

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品 (全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

N H K 学園教材サービス
鎌倉市俳句大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

	口	座	記	号	番	号			
0	0	1	9	0	7		5	6	3
							6	0	8
加入者名	NHK学園教材サービス								

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

令和元年度

N H K 学園鎌倉市俳句大会

入選証および専用額申込書

名 前	フリガナ	受講者番号							
住 所	〒								
電 話 番 号	-								

○入選証

掲載誌 ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金 額
				1,500 円		
				1,500 円		
				1,500 円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
4枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数 量	1,500 円 ×	枚	金 額	
額・クラシックゴールド	数 量	2,500 円 ×	枚	金 額	

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

実作力アップコース

名句で学ぶ！

表現の幅を広げたい方に

俳句 表現のコツ

- リフレイン、押韻、オノマトペ、一物仕立など、俳句の表現テクニックや効果を学びます。今まで知らずに使っていた表現方法やより効果的な使い方を再確認することで、表現の幅はぐんと広がります。
- レポート課題は3回。各レポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース

俳句倶楽部

- 俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・
アドバイスが
受けられます

ワンポイントアドバイス講師
(2019年5月)



井上康明
「郭公」



岩岡中正
「阿蘇」



片山由美子
「香雨」



小浜杜子男



高野ムツオ
「小熊座」



寺井谷子
「自鳴鐘」



西村和子
「知音」



三村純也
「山茶花」

- 受講期間1年(自動継続)
- レポート提出9回(ワンポイント・アドバイス投句5句×4回、誌上句会 投句2回、互選2回、コンクール1回)

教材

レポートセット

〈別送〉機関誌(4冊)

「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」(各2冊)

◆「俳句倶楽部」の特徴

レポート

- ・ワンポイント・アドバイスは全4回(1回につき、自由題5句提出)
 - ・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
 - ・希望の講師を選べます。
- ※各講師には定員があります。一定数を越えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

- ・誌上で「句会」を楽しみます。
- ・会員の自選作品を掲載した作品一覧から2句選び(互選)、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

- ・年1回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

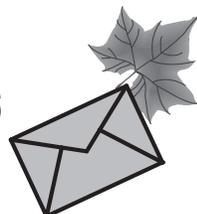
有馬朗人、宇多喜代子、大串 章、
コンクール選者 黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、
星野 椿、宮坂静生

講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。



0120-06-8881 FAX042-574-1006

〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園 6B05 係
ホームページ <http://www.n-gaku.jp/life>



参加者募集中! NHK学園 学習の旅

大人の東京俳句散歩 ～秋の季語「相撲」を詠む～

令和元年9月17日(火)～18日(水) (1泊2日)

訪問先 東京都墨田区(両国国技館ほか)

同行講師 宇多喜代子



「東京の四季を楽しむ」がテーマの俳句の旅です。宇多喜代子先生とともに、両国国技館で行われる大相撲9月場所を観戦し、秋の季語「相撲」を詠みます。力士同士がぶつかり合う迫力のひとときを楽しみ、俳句に詠みましょう。



同行講師
宇多喜代子

「草樹」会員代表 NHK学園俳句講座アドバイザー
昭和十年山口県生れ。「獅林」を経て「草苑」(桂信子主宰) 創刊とともに入会。桂信子没後に創刊した「草樹」の会員としてその精神を継承。第三十五回蛇笏賞、第二十七回詩歌文学館賞、第十四回現代俳句大賞受賞。読売新聞俳壇選者。「NHK俳句」選者。句集『夏月集』『象』『記憶』『宇多喜代子俳句集成』『森へ』など。

冬の陸奥に高野ムツオの故郷を訪ねて

令和元年12月9日(月)～11日(水) (2泊3日)

訪問先 宮城県栗原市(伊豆沼ほか)

現地講師 高野ムツオ

(「小熊座」主宰、NHK学園「俳句倶楽部」講師)



俳壇で活躍中の高野ムツオ先生の生まれ育った宮城県を訪れます。

宮城県北部にしか飛来しない貴重な渡り鳥マガンをはじめとした多種多様な生物の観察や、伝統芸能「栗原神楽」をこの旅限定で披露いただきます。



現地講師
高野ムツオ

「小熊座」主宰
昭和二十二年宮城県生れ。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房に師事。現代俳句協会副会長。NHK学園俳句倶楽部講師。第四十四回現代俳句協会賞、第六十五回読売文学賞、第六回小野市詩歌文学賞、第四十八回蛇笏賞受賞。句集『陽炎の家』『萬の翅』『片翅』、著書『時代を生きた名句』など。

各スクーリングの案内書は

「NHK学園スクーリング事務局」までお電話ください。
受付時間/月～金曜日(祝日除く)の9:30～17:30

TEL 042-572-3151(代表)

FAX 042-573-6090

生涯学習フェスティバル俳句大会 投句要領

全国各地や誌上での特句大会を開催しています。どなたでもご参加いただけます。

規定の用紙（コピー可）でご投句ください。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。（自由題二句または自由題二句＋題詠一句）

◆題詠 ※題詠は題からイメージされる作品募集となります。

※題詠のみの応募はできません。

◆未発表の自作に限ります（作者本人からの投句に限ります）。

◆二重投句は固くお断りいたします。

◆投句後の作品訂正、さしかえはできません。

◆同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

投句料

①自由題二句の場合 2、000円

②自由題二句と題詠一句の場合 2、800円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

送金方法

◆郵便為替（定額小為替、普通為替を郵便局で購入）、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください。（切手の代用は不可）

郵便払込をご利用の場合

郵便局においてある、郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投句料をご記入の上、払込みください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号…00190-5-336869

加入者名…NHK学園俳句大会事務局

賞・発表

◆大会大賞（文部科学大臣賞の候補作品となります）、市長賞、選者特選・秀作・佳作など。

◆特選・秀作内定者には事前に文書でお知らせします。

◆投句された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。（誌上大会を除く）

◆会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆入選・入賞作品は、NHK学園で使用させていただきます。

2019年度 NHK学園生涯学習フェスティバル俳句大会開催（予定）

大会名称	開催(発表)予定日	投句締切	題	会場
伊香保俳句大会	6月26日(水)	締め切りました	*温	伊香保温泉 ホテル天坊
武蔵野市俳句大会	8月3日(土)	5月31日	*野	武蔵野市民文化会館
月山俳句大会	10月23日(水)	7月19日	*信	山形県西川交流センター「あいべ」
誌上俳句大会	令和2年 3月10日(火)	12月22日	*道	—————

*題詠は題からイメージされる作品募集となりますので、作品に題にある漢字がいらなくても結構です。

NHK学園生涯学習フェスティバル

武蔵野市俳句大会

～東京都武蔵野市～

豊かな自然と文化施設も充実した武蔵野市にて行われる大会です。この俳句のつどいにぜひご参加ください。

投句募集

自由題二句、題詠一句

題詠は「野」(テーマ詠)

題詠は「野」の漢字が入らなくても結構です。

投句締切

二〇一九年五月三十一日(金)消印有効

日時

二〇一九年八月三日(土)午後一時～四時

会場

武蔵野市民文化会館

対談

「十七音への挑戦」

片山由美子・鈴木章和

選者

片山由美子・岸本葉子・神野紗希
小島健・鈴木章和(五十音順・敬称略)

当日句募集

(無料)

題「武蔵野の夏を詠む」

当日、会場で作句一句をお出し下さい。
入賞作品は会場にて発表いたします。



中央通り

武蔵野市 俳句大会への

ご参加をお待ちしております。



武蔵野プレイス



ゾウのはな子の銅像



ハモニカ横丁

月山俳句大会

山形県西川町

山形県の中央部にそびえ立つ月山で行われる大会です。この俳句のつどいにぜひご参加ください。

投句募集

自由題二句、題詠一句

題詠は「信」(テーマ詠)

題詠は「信」の漢字が入らなくても結構です。

投句締切

二〇一九年七月十九日(金)消印有効

日時

二〇一九年十月二十三日(水)

午後一時～四時

会場

西川交流センター

「あいべ」大ホール

講演

「月山と芭蕉」 宮坂静生

選者

柏原眠雨・津高里永子
星野高士・宮坂静生

【当日句選者】阿部月山子・工藤稲邨

庄司りつこ・鈴木正子

(五十音順・敬称略)

当日句募集(無料)

題「月山の秋を詠む」

当日、会場で自作一句をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。



雪の回廊

スキー場のオープンに合わせて除雪された雪の壁。高いところでは10mを超え、圧倒的な迫力です。

月山 俳句大会への

ご参加をお待ちしております。



残雪のブナの原生林



紅葉の月山



真冬のイベント雪旅籠

